

事業概要

令和元年度



福岡県食肉衛生検査所

〒818-0072

福岡県筑紫野市二日市中央4丁目5番34号

e-mail shokunikukensa@pref.fukuoka.lg.jp

TEL 092(923)6621

FAX 092(923)6648

はじめに

食肉・食鳥肉の安全・安心の確保については、生産から処理、加工、流通、販売に至るまで関係者それぞれが、食肉・食鳥肉を摂取することによる人の健康への悪影響を未然に防止する観点から、科学的知見に基づく必要な措置を講じていかなければなりません。

本県では、食品の生産から販売に至る、一貫した食品の安全・安心確保対策の一層の推進を図るため、「福岡県食品の安全・安心の確保に関する条例」を制定し、関係者全体で取り組むことができるよう、理念や関係者等の責務・役割を明確にしました。

当所においても、食肉・食鳥肉の安全・安心の確保に向けて、流通の源であると畜場や大規模食鳥処理場において、一頭・一羽ごとの厳正な検査を実施し確実な疾病排除を行うとともに、施設の管理や食肉のモニタリング検査に基づく指導により食肉・食鳥肉処理工程における衛生確保並びにその水準の向上に努めています。また、認定小規模食鳥処理場への定期的な監視指導も実施し、衛生水準の向上等を図っています。

一昨年 6 月、食品衛生法等の一部を改正する法律が公布されたことを受け、と畜場並びに大規模食鳥処理場においては令和 3 年 6 月 1 日までに HACCP に基づく衛生管理を運用していかなければなりません。

現在、当所では所管すると畜場並びに大規模食鳥処理場が行う HACCP プランの策定や試行に向けた取り組みを支援しています。今後、国は全国の食肉衛生検査所等を外部検証機関としての位置付けを考えており、これまでの支援に加え、具体的な外部検証の実施方法の検討や職員の資質向上にも取り組むこととしています。

一方、安全な食肉は、肉となる家畜が健康であることが大前提であり、より健康な家畜の生産に役立てるため、と畜検査の成績を生産農家に家畜保健衛生所を通じてフィードバックしています。さらに、豚熱、口蹄疫、高病原性鳥インフルエンザ等の特定家畜伝染病についても家畜保健衛生所との連携をより緊密に行い、国内外の情報を収集しています。

また、野生鳥獣肉処理施設についてもと畜場等に準じた疾病排除や衛生的な食肉処理の確認ために定期的な立ち入りを行っています。

今後とも、最新の知識の習得と技術の研鑽に努め、食肉・食鳥肉の安全確保のための検査・指導体制の強化を図るとともに、食品衛生・家畜衛生等の関係機関との情報交換を密にし、幅広い視点から食肉・食鳥肉のより一層の衛生確保に努めて参る所存でありますので、引き続きご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

ここに、令和元年度事業概要をとりまとめましたので、ご高覧をいただければ幸いと存じます。

令和 2 年 7 月

福岡県食肉衛生検査所長 田原 徳三

目次

第1章 総説

1	福岡県のと畜、食鳥検査の概要	1
2	施設概要及び位置案内図	2
3	組織・機構及び職員構成	4
4	所管すると畜場及び食鳥処理場の位置図	5
5	所管と畜場の概要	6
6	所管大規模食鳥処理場の概要	7
7	所管認定小規模食鳥処理場の概要	8
8	令和元年度収入及び支出の状況	9
9	と畜・食鳥検査手数料及び証明手数料	9

第2章 事業概要

1	と畜検査	
(1)	と畜場別・畜種別と畜検査頭数	10
(2)	と畜場別・畜種別月間検査頭数	11
(3)	と畜場内と殺頭数及び獣畜のと殺解体禁止又は廃棄したものの原因	12
(4)	と畜場別・畜種別と殺解体禁止又は全部廃棄頭数	13
(5)	牛のと畜場別・器官別疾病数	14
(6)	馬のと畜場別・器官別疾病数	16
(7)	豚のと畜場別・器官別疾病数	17
(8)	とくのと畜場別・器官別疾病数	19
(9)	めん羊のと畜場別・器官別疾病数	19
(#)	山羊のと畜場別・器官別疾病数	19
(11)	病畜検査状況	21
(12)	と畜種別・出荷地別搬入状況	22
(13)	BSE検査	23
2	食鳥検査	
(1)	大規模食鳥処理場の食鳥検査羽数及び検査結果	24
	過去3年間の廃棄の原因(禁止・全部廃棄)	25
	と殺、内臓の摘出禁止又は廃棄したものの原因	26
(2)	認定小規模食鳥処理場の確認羽数及び確認結果	27
3	精密検査	
(1)	微生物検査	28
(2)	理化学検査	29
(3)	病理検査	31
(4)	業務管理基準(GLP)の対応、整備について	33
4	衛生指導	
(1)	微生物検査	35
(2)	衛生旬間	36
(3)	と畜場、大規模食鳥処理場に併設する食肉処理施設等の監視指導	37

第3章 調査研究

1	と畜検査で遭遇した豚のろ胞性リンパ腫の症例	38
2	学会及び誌上発表一覧	41

第 1 章 総 説

1 福岡県のと畜、食鳥検査の概要

(1) と畜検査の概要

福岡県が管轄する地域（福岡市、北九州市、大牟田市、久留米市を除く。）にはと畜場が2施設ある。令和元年度は専任のと畜検査員18名でと畜検査を行った。

令和元年度の検査頭数は牛17,508頭、とく71頭、馬1,081頭、豚62,524頭、めん羊7頭、山羊1頭で、前年度比は牛で708頭、とくで8頭、馬で23頭、豚で590頭、めん羊で6頭、山羊で1頭増加している。各と畜場の検査頭数は第2章に示しているとおりでである。

本県管轄内で最も大きなと畜場である九州協同食肉株式会社は全農の関連会社で、牛豚ともに県内をはじめ九州各県及び山口県等広い範囲から搬入されており、牛においては肉用種の比率が高い。

一方、県南部のと畜場である県南食肉センターでは年間のと畜頭数の7割以上が馬で占められており、牛においては乳用種の比率が高い。

BSEスクリーニング検査は、平成29年4月に健康なと畜牛の検査が廃止されたため、症状等により検査が必要とみなされた牛の検査を実施している。

最新の知識の習得と技術の研鑽に努め、と畜検査による疾病排除及びと畜場の衛生面での向上を目指している。

(2) 食鳥検査の概要

本県が管轄する地域には、大規模食鳥処理場が2施設、認定小規模食鳥処理場が15施設（休止2施設含）あり、専任の食鳥検査員6名で食鳥検査等を行っている。

大規模食鳥処理場については、処理場の開場時刻の都合により朝6時及び6時45分から食鳥検査を行っている。令和元年度の検査羽数は、ブロイラー559,564羽、成鶏2,327,268羽、合計2,886,832羽であった。

認定小規模食鳥処理場については、各施設の稼働時間に合わせて定期的に巡回し、食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律に基づく基準適合の確認及び施設の維持管理等について指導・相談対応を行っている。

また、大規模食鳥処理場においては鳥インフルエンザを発見した場合の対応なども整備し、消費者へ安全な食肉を届けるための検査体制の充実に努めている。

と畜検査や食鳥検査で得た検査成績は、県内家畜保健衛生所等を通して生産農家へフィードバックし健康な家畜の生産に活用してもらうことで、農家から消費者に至るまでの食肉に係る業界全体の安全性の確保を目指している。

2 施設概要及び位置案内図

敷地面積 1,290.11 m²

建 物	(建坪総面積合計 744,338 m ²)		
①本館棟	鉄筋コンクリート	2階建	648,588 m ²
②付属舎棟	鉄筋コンクリート	平屋造	54,000 m ²
③車庫棟	鉄筋コンクリート	平屋造	26,560 m ²
④倉庫棟	木造プレハブ	平屋造	15,190 m ²

建設費総額 213,639 千円 (国庫補助 17,065 千円)
 (起 債 92,000 千円)
 (一般県費 104,574 千円)

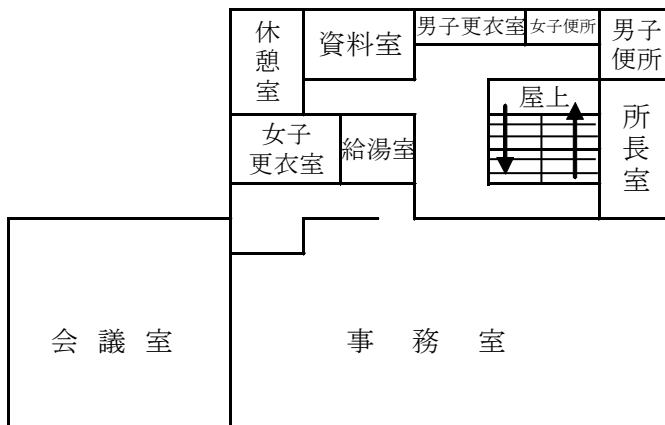
建設費内訳 設計委託費 9,770 千円
 工事費 169,079 千円
 備品費 30,834 千円
 その他諸経費 3,956 千円

竣 工 昭和60年3月30日

増 築 平成4年3月31日



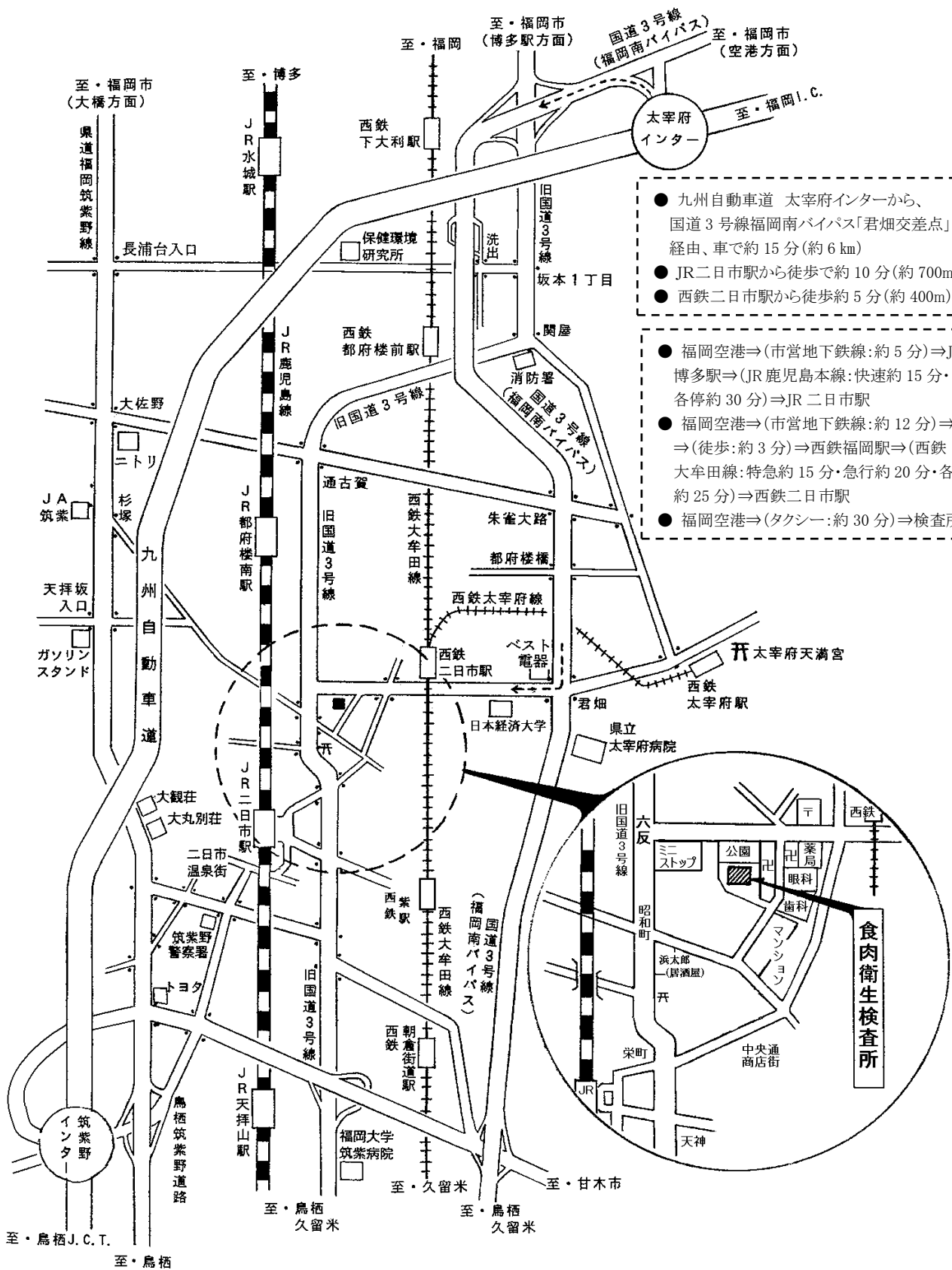
建物配置図



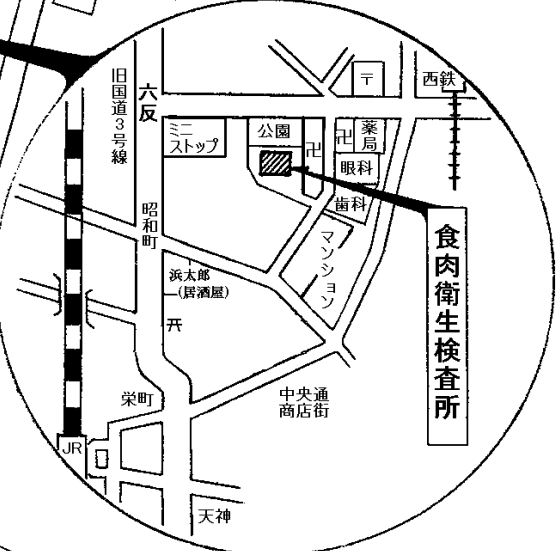
建物平面図(2階)



建物平面図(1階)

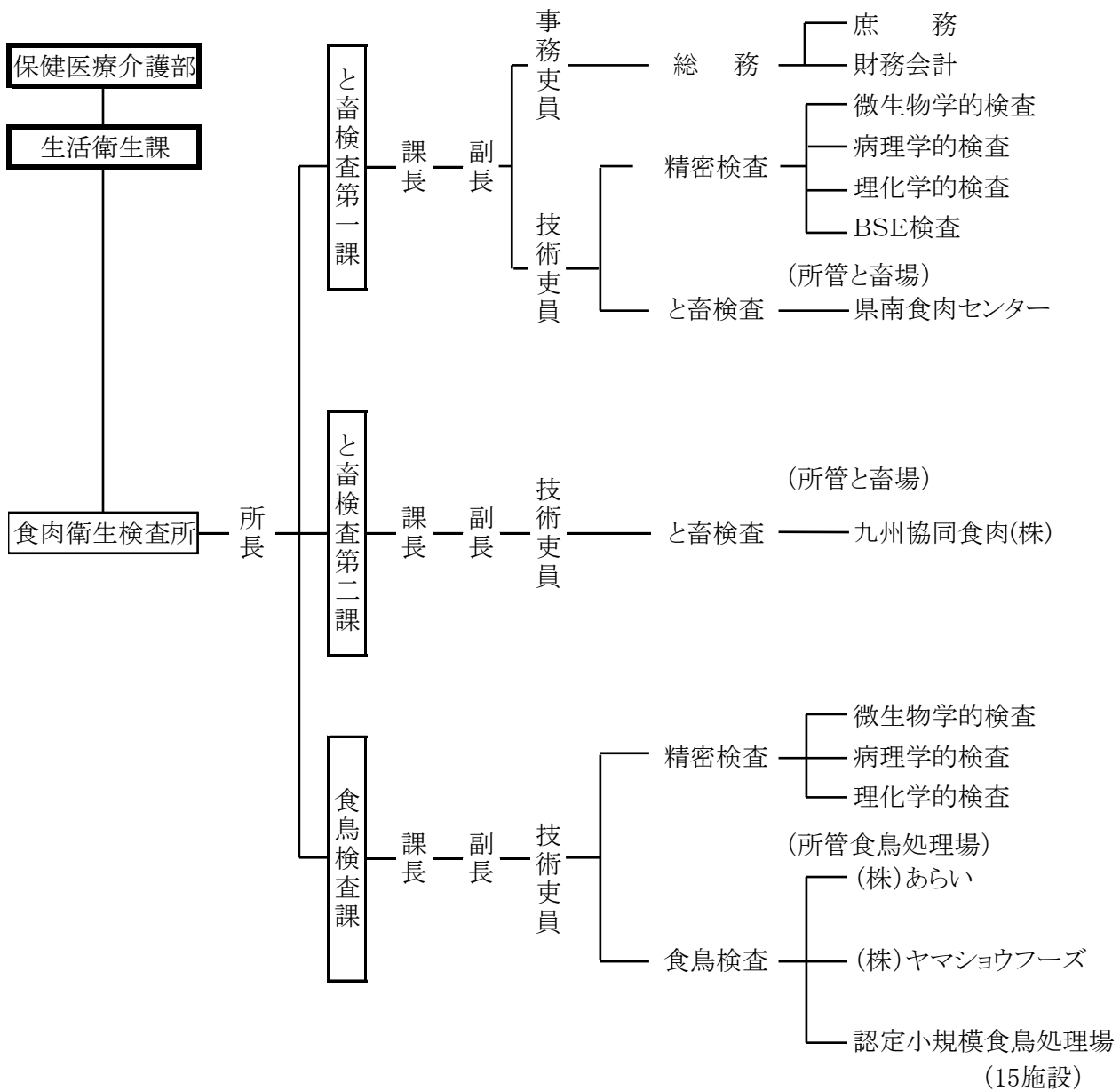


- 九州自動車道 太宰府インターから、国道3号線福岡南バイパス「君畑交差点」経由、車で約15分(約6km)
 - JR二日市駅から徒歩で約10分(約700m)
 - 西鉄二日市駅から徒歩約5分(約400m)
-
- 福岡空港⇒(市営地下鉄線:約5分)⇒JR博多駅⇒(JR鹿児島本線:快速約15分・各停約30分)⇒JR二日市駅
 - 福岡空港⇒(市営地下鉄線:約12分)⇒天神⇒(徒歩:約3分)⇒西鉄福岡駅⇒(西鉄大牟田線:特急約15分・急行約20分・各停約25分)⇒西鉄二日市駅
 - 福岡空港⇒(タクシー:約30分)⇒検査所



3 組織・機構および職員構成

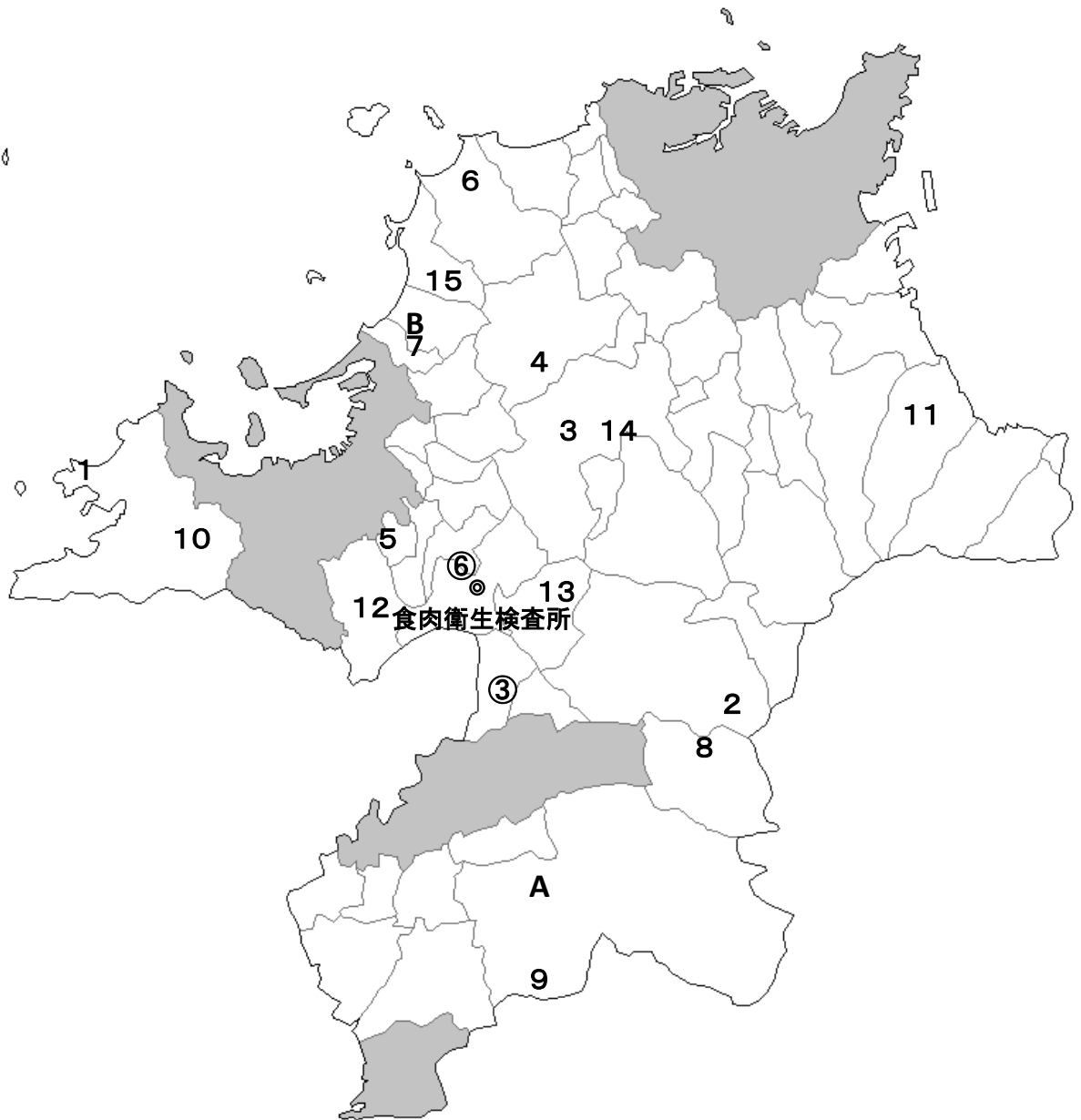
(1) 検査所の組織及び機構 (令和2年3月31日現在)



(2) 職員構成 (令和2年3月31日現在)

	総員	事務吏員	技術吏員 (獣医師)							
		事務主査	所長	課長	参事補佐	副長	企画主査	技術主査	主任技師	技師
所長	1		1							
と畜検査第一課	13	2		1		1		2	6	1
と畜検査第二課	7			1		1		1	4	
食鳥検査課	6			1		1		3	1	
計	27	2	1	3	0	3	0	6	11	1

4 所管すると畜場及び食鳥処理場の位置図



③、⑥：と畜場

A、B：大規模食鳥処理場（年間処理羽数が30万羽を超える施設）

1～15：認定小規模食鳥処理場（年間処理羽数が30万羽以下の施設）

* 福岡市、北九州市、大牟田市及び久留米市を除く。

5 所管と畜場の概要 (令和2年3月31日現在)

と畜場 番号	と畜場名	設置者	所在地	許可年月日	面積(m ²)		処理能力(頭/1日)		
					敷地	建物(延)	大動物	小動物	小動物換算
3	県南食肉センター	県南食肉センター協同組合	〒838-0132 小郡市光行1152	H4.10.16	4,975	1,537	40	50	210
6	九州協同食肉株式会社	九州協同食肉株式会社	〒818-0105 太宰府市都府楼南5-15-1	S58.9.24	21,976	4,079	100	300	700

6 所管大規模食鳥処理場の概要 (令和2年3月31日現在)

番号	食鳥処理場名	所在地	許可年月日	処理食鳥種	平均処理羽数(羽/1日)	処理の形態	食鳥処理衛生管理者設置数
A	株式会社 ヤマショウフーズ	〒834-0016 八女市豊福241-2	H6.9.26	成鶏 (採卵鶏)	8,652	外剥ぎ	9名
B	株式会社 あらい	〒811-3134 古賀市青柳3272-17	H6.11.10	ブロイラー	2,265	自動中抜き	10名

7 所管認定小規模食鳥処理場の概要(令和2年3月31日現在)

番号	食鳥処理施設		処理食鳥種		年間確認羽数(羽/年)			許可年月日	備考
	所在地	施設名	ブロイラー	成鶏	30万 ～ 10万	10万 ～ 1万	1万 以下		
1	糸島市	山本かしわ店		○			○	H4.3.30	
2	朝倉市	因間食鳥		○		○		H4.3.30	
3	飯塚市	石丸食鳥		○		○		H4.3.30	
4	宮若市	清水食鶏	○	○			○	H4.3.30	
5	春日市	とり武		○		○		H6.7.1	
6	宗像市	広橋養鶏場		○		○		H10.5.27	
7	古賀市	青柳養鶏場		○			○	H13.9.20	
8	うきは市	(有)石井食鳥		○		○		H15.8.6	
9	八女市	ミミタビー	○				○	H23.6.1	
10	糸島市	(有)ヨコテ		○			○	H25.2.7	
11	築上町	城井ふる里村	○	○			○	H25.8.7	
12	筑紫郡那珂川町	うそやまファーム		○			○	H27.3.16	
13	朝倉郡筑前町	俊工房		○			○	H28.5.9	
14	飯塚市	北九福鳥(株)飯塚営業所	/	○	/	/	○	H4.3.30	休止届(H25.7.12)
15	福津市	株式会社 イケダ	○	○	○	/	/	H4.3.30	休止届(H27.5.20) 承継届(H25.5.27) (株)総食より(株)イケダへ

8 令和元年度収入及び支出の状況

区分	科目	令和元年度決算額
収入	と畜検査手数料	29,934,300
	食鳥検査手数料	11,547,328
	証明手数料	145,200
	食鳥処理事業許可手数料	0
	計	41,626,828
支出	普通旅費	2,029,032
	光熱水費	2,165,490
	その他需用費	8,564,513
	通信運搬費	254,721
	その他役務費	337,624
	委託費	1,486,238
	使用料及び賃借料	146,550
	備品購入費	1,144,022
	計	16,128,190

(単位:円)

9 と畜・食鳥検査手数料及び証明手数料

区分	手数料	
検査手数料	牛・馬	1頭につき600円
	とく・こま・豚・めん羊・山羊	1頭につき300円
	食鳥	1羽につき4円
諸証明手数料	1件につき400円	

第 2 章 事業概要

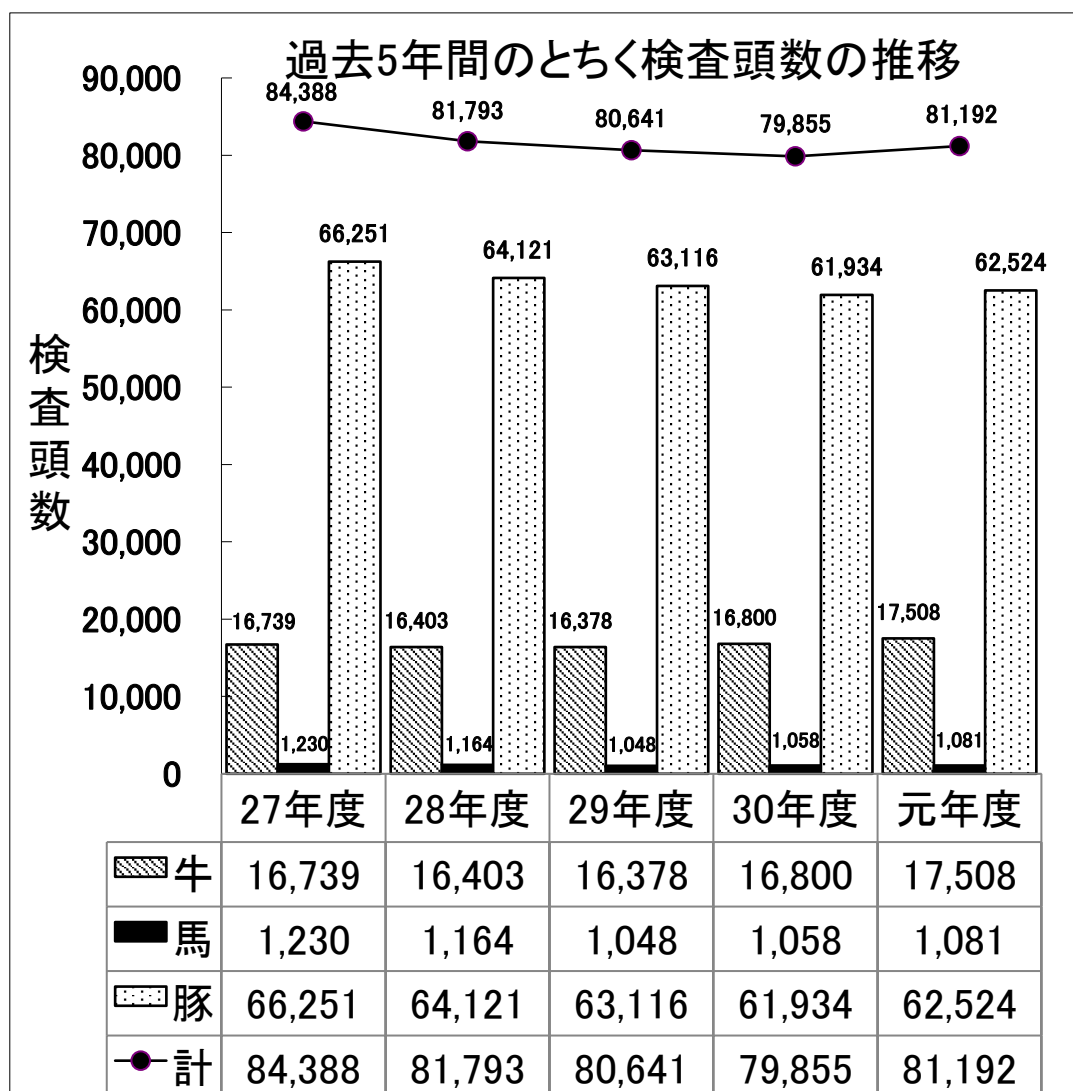
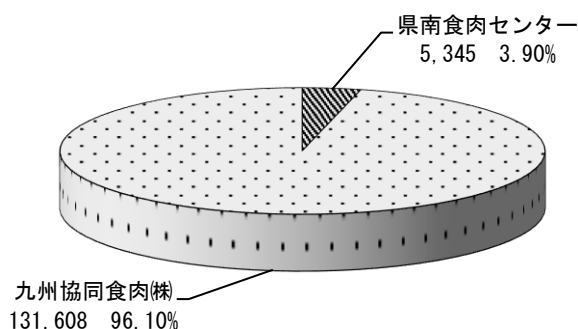
1 と畜検査

(1) と畜場別・畜種別と畜検査頭数

	牛	とく	馬	豚	めん羊・山羊	小動物換算合計 (うち病畜数)
県南食肉センター	237 (60)	65	1,081	0	8	5,345 (240)
九州協同食肉(株)	17,271 (104)	6 (4)	0	62,524	0	131,608 (420)
合計実頭数 (うち病畜数)	17,508 (164)	65 (4)	1,081	62,524	8	136,953 (660) 81,186 (168)

※小動物換算：大動物＝小動物×4

と畜場別と畜検査頭数（小動物換算）



(2) と畜場別・畜種別月間検査頭数

【県南食肉センター】

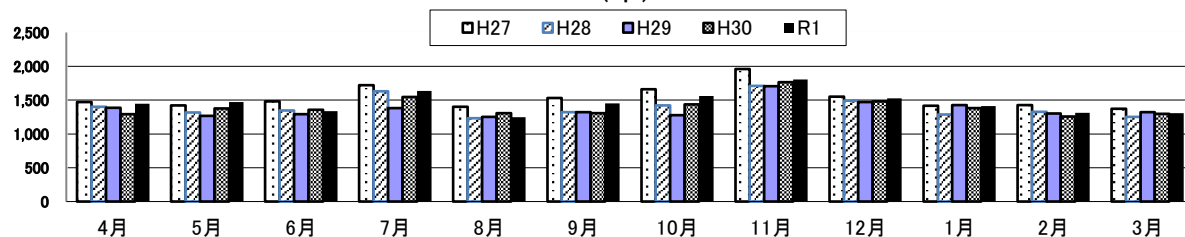
畜種	計	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
牛	237	25	16	17	35	14	13	25	25	25	15	15	12
とく	65	6	0	7	2	0	9	7	2	7	10	7	8
馬	1,081	83	93	73	83	141	67	72	70	201	68	61	69
豚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
めん羊	7	0	0	0	5	0	0	0	0	2	0	0	0
山羊	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0

【九州協同食肉(株)】

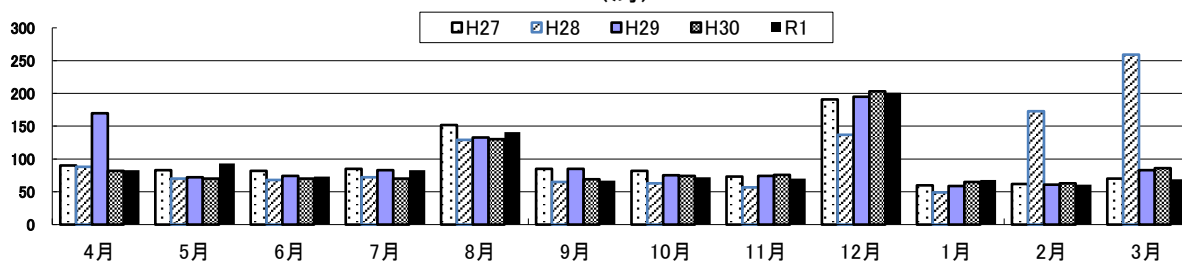
畜種	計	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
牛	17,271	1,422	1,453	1,317	1,602	1,232	1,440	1,538	1,782	1,500	1,397	1,295	1,293
豚	62,524	5,420	5,241	4,521	5,165	4,937	5,003	5,566	5,288	5,532	5,531	4,976	5,344
とく	6	1	0	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0

過去5年間の月別とちく検査頭数の推移

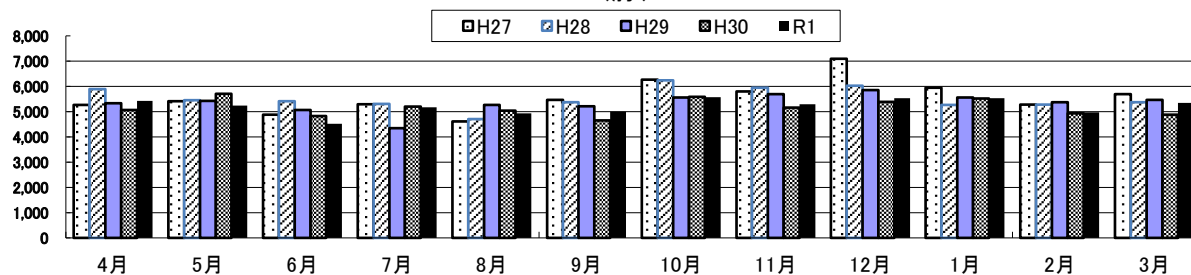
(牛)



(馬)



(豚)



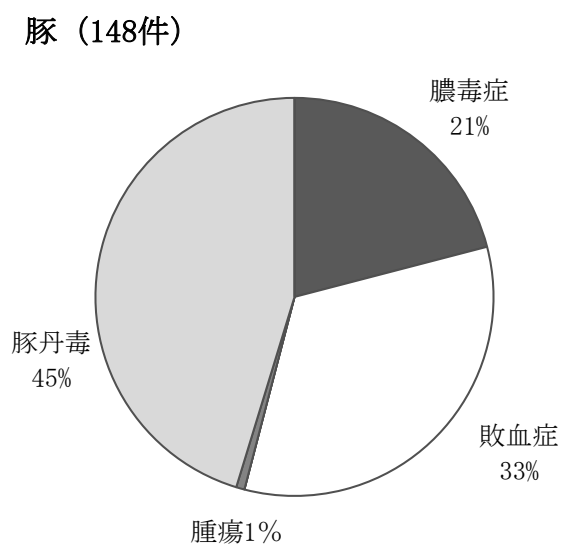
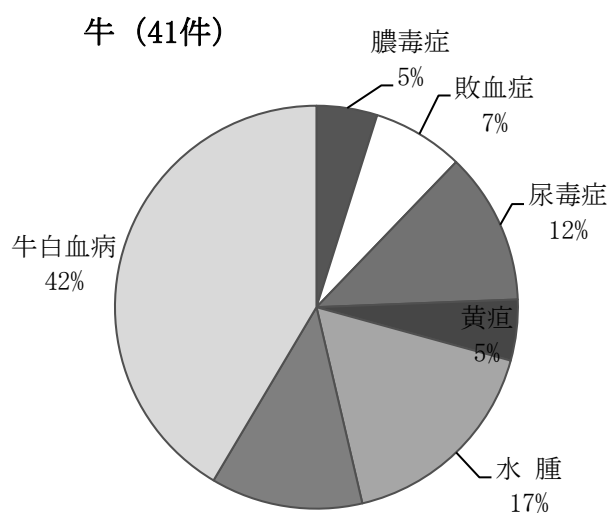
(3) と畜場内と殺頭数及び獣畜のと殺解体禁止又は廃棄したもの原因

獣種	と畜場内と殺頭数	措置	処分実頭数	疾病別頭数																				計						
				細菌病							ウイルス・リケッチア病		原虫病		寄生虫病			その他の疾病												
				炭疽	豚丹毒	豚赤痢	サルモネラ病	結核病	ブルセラ病	破傷風	放線菌病	その他	豚コレラ	その他	トキソプラズマ	その他	囊胞虫病	ジストマ病	その他	膿毒症	敗血症	尿毒症	黄疸		水腫	腫瘍	中毒諸症	炎症又は炎症産物による汚染	変性又は萎縮	その他
牛	17,508	禁止																												
		全部廃棄	41															2	3	5	2	7	22							41
		一部廃棄	15,241						4						49	4						189	1		13,513	6,513	42	20,315		
とく	71	禁止																												
		全部廃棄																												
		一部廃棄	11																			3			20	1		24		
馬	1,081	禁止																												
		全部廃棄																												
		一部廃棄	293																			1			103	246	5	355		
豚	62,524	禁止	29														29												29	
		全部廃棄	148		67													31	49					1						148
		一部廃棄	32,382																			2			32,382	16	1,042	33,442		
めん羊	7	禁止																												
		全部廃棄																												
		一部廃棄	4																							3	2	1	6	
山羊	1	禁止																												
		全部廃棄																												
		一部廃棄																												

(4) と畜場別・畜種別と殺解体禁止又は全部廃棄頭数

種別 と畜場名	獣種	と殺解体禁止				全部廃棄									
		膿毒症	敗血症	尿毒症	合計	膿毒症	敗血症	尿毒症	黄疸	水腫	腫瘍	白血病	豚丹毒	豚赤痢	合計
県南食肉センター	牛	0	0	0	0	1	1	0	0	2	5	1			10
	とく	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	馬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			0
	豚	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
九州協同食肉㈱	牛	0	0	1	0	1	2	5	2	5	0	16			31
	豚	29	0	0	29	31	49	0	0	0	0	1	67		148
合計	牛	0	0	1	1	2	3	5	2	7	5	17	0	0	41
	とく	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	馬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	豚	29	0	0	29	31	49	0	0	0	0	1	67	0	148

全部廃棄頭数疾病別割合



(5) 牛のと畜場別・器官別疾病数 【図1】

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数	237	17,271	17,508
処分実頭数	135	15,106	15,241

疾 病 名				
循環器系	心筋炎		11	11
	心外膜炎	14	319	333
	心内膜炎		4	4
	心臓リポフスチン沈着	2	5	7
	心内膜石灰沈着症			0
	心筋出血		19	19
	心嚢膜膿瘍		1	1
	大動脈炎			0
	小計	16	359	375
血液・造血器系	脾膿瘍		2	2
	脾包膜炎		4	4
	脾炎			0
	脾腫			0
	リンパ節膿瘍		36	36
	リンパ節結節		3	3
	リンパ節血腫			0
	小計	0	45	45
呼吸器系	肺炎(その他)	12	683	695
	肺膿瘍	3	288	291
	胸膜炎	11	6,038	6,049
	横隔膜膿瘍	3	326	329
	横隔膜水腫			0
	縦隔膜膿瘍			0
	縦隔膜水腫			0
	小計	29	7,335	7,364
泌尿・生殖器系	腎炎(その他)	4	559	563
	腎膿瘍		16	16
	腎出血			0
	腎結石		127	127
	腎臓リポフスチン沈着	1	7	8
	腎腫瘍			0
	水腎症			0
	腎周囲脂肪壊死		801	801
	のう胞腎	1	37	38
	膀胱炎		20	20
	膀胱膿瘍		2	2
	膀胱結石		19	19
	尿道炎			0
	尿道結石			0
	乳房炎	17	22	39
	乳頭腫			0
	子宮蓄膿症		2	2
	子宮内膜炎			0
	膣脱			0
	子宮水腫		1	1
卵胞囊腫			0	
小計	23	1,613	1,636	

疾病名	と畜場名			
	県南	九食	合計	
消化器系	舌膿瘍		1	1
	舌潰瘍			0
	舌炎		3	3
	胃炎(その他)	46	1,563	1,609
	胃潰瘍			0
	胃膿瘍		71	71
	第3胃色の異常		1,004	1,004
	第3胃形の異常		50	50
	小腸炎	71	4,132	4,203
	大腸炎	74	4,640	4,714
	腸膿瘍			0
	腸結節虫症		4	4
	腸間膜膿瘍		18	18
	腸間膜脂肪壊死	4	1,819	1,823
	腹膜炎	2	36	38
	盲腸結石			0
	肝蛭症	2	42	44
	肝炎(その他)	40	1,966	2,006
	胆管炎	3	341	344
	肝膿瘍	7	551	558
	肝硬変			0
	肝包膜炎	11	1,339	1,350
	肝出血	19	3,865	3,884
	肝静脈炎	3	45	48
	肝富脈斑	11	94	105
	肝うっ血	1	29	30
	肝リポフスチン沈着	2	4	6
	鋸屑肝	3	741	744
	臍姪症		5	5
	臍膿瘍		1	1
臍炎			0	
ヘルニア			0	
小計	299	22,364	22,663	
運動器系	筋(筋間)水腫	4	185	189
	筋炎(その他)	27	586	613
	筋膿瘍	3	37	40
	筋出血			0
	筋脂肪症			0
	筋リポフスチン沈着			0
	関節炎	8	7	15
	脱臼			0
	骨折		3	3
小計	42	818	860	
その他	皮膚炎			0
	パピローマ			0
	皮下水腫			0
	皮下膿瘍			0
	放線菌病		4	4
	メラノーシス			0
	腫瘍		1	1
小計	0	5	5	
合計	409	32,539	32,948	

(6) 馬のと畜場別・器官別疾病数 【図2】

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数	1,081		1,081
処分実頭数	293		293

疾病名				
循環器系	心筋出血			0
	心外膜炎	5		5
	心内膜炎			0
	心筋炎			0
	心臓リポフスチン沈着	2		2
	大動脈炎			0
小計		7	0	7
造血系・ 血液系	脾膿瘍			0
	脾腫			0
	リンパ節膿瘍			0
小計		0	0	0
呼吸器系	肺炎(その他)	22		22
	肺腫瘍			0
	肺砂粒症			0
	肺膿瘍	1		1
	胸膜炎	4		4
小計		27	0	27
消化器系	胃炎(その他)			0
	小腸炎	4		4
	大腸炎	3		3
	胃膿瘍			0
	腸結節虫症			0
	腸うっ血			0
	腹膜炎	6		6
	肝炎(その他)	12		12
	肝硬化			0
	肝包膜炎	4		4
	肝出血	1		1
	肝線維症	1		1
	肝砂粒症	233		233
	肝リポフスチン沈着			0
	肝うっ血			0
肝膿瘍			0	
鋸屑肝	1		1	
肝富脈斑			0	
小計		265	0	265
泌尿・ 生殖器系	腎炎(その他)			0
	腎膿瘍			0
	腎結石			0
	嚢胞腎			0
	腎臓の腫瘍			0
	リポフスチン沈着腎			0
	膀胱炎			0
小計		0	0	0
運動器系	筋炎(その他)	18		18
	筋出血	9		9
	筋(筋間)水腫	1		1
	筋膿瘍			0
	腱炎	2		2
	腱断裂			0
	関節炎	4		4
	骨折	5		5
	脱臼			0
小計		39	0	39
その他	メラノーマ			0
	メラノージス			0
	皮膚炎(その他)			0
	小計	0	0	0
合計		338	0	338

(7) 豚のと畜場別・器官別疾病数 【図3】

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数		62,524	62,524
処分実頭数		32,382	32,382

疾 病 名				
循環器系	心筋炎		58	58
	心筋膿瘍		2	2
	心筋出血		15	15
	心内膜炎			0
	心外膜炎		3,938	3,938
	心奇形			0
	小計	0	4,013	4,013
造血系 血液・	脾膿瘍		1	1
	脾腫		6	6
	脾包膜炎		443	443
	リンパ節膿瘍		113	113
	リンパ節結節		1,159	1,159
	小計	0	1,722	1,722
呼吸器系	肺炎(その他)		8,458	8,458
	SEP		1,458	1,458
	肺膿瘍		985	985
	肺虫症			0
	胸膜肺炎		44	44
	胸膜炎		5,283	5,283
	横隔膜膿瘍		2	2
小計	0	16,230	16,230	
消化器系	胃炎		2,837	2,837
	胃膿瘍		3	3
	胃潰瘍		1	1
	小腸炎		4,829	4,829
	大腸炎		1,355	1,355
	腸膿瘍			0
	腹膜炎		3,227	3,227
	腹腔内膿瘍			0
	腸気泡症		3	3
	直腸脱・脱肛		3	3
	ヘルニア		196	196
	肝炎(その他)		4,046	4,046
	肝膿瘍		4	4
	間質性肝炎		3,501	3,501
	肝硬変		2	2
	肝包膜炎		3,966	3,966
	肝出血		1	1
肝うっ血			0	
小計	0	23,974	23,974	

疾病名	と畜場名	県南	九食	合計
泌尿・生殖器系	腎炎(その他)		696	696
	腎膿瘍		1	1
	のう胞腎		833	833
	水腎症			0
	膀胱炎		2	2
	小計	0	1,532	1,532
運動器系	筋炎(その他)		236	236
	筋膿瘍		324	324
	筋水腫		2	2
	筋出血			0
	骨折		1	1
	関節炎		2	2
	小計	0	565	565
その他	皮膚炎			0
	皮下膿瘍		44	44
	耳血腫			0
	耳介変形			0
	小計	0	44	44
合計		0	48,080	48,080

器官別疾病数割合

図1 牛 (30,364件)

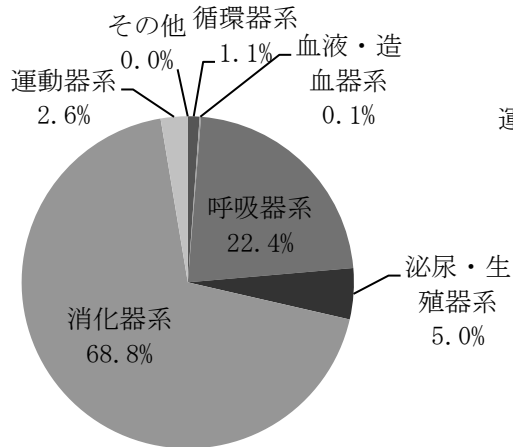


図2 馬 (504件)

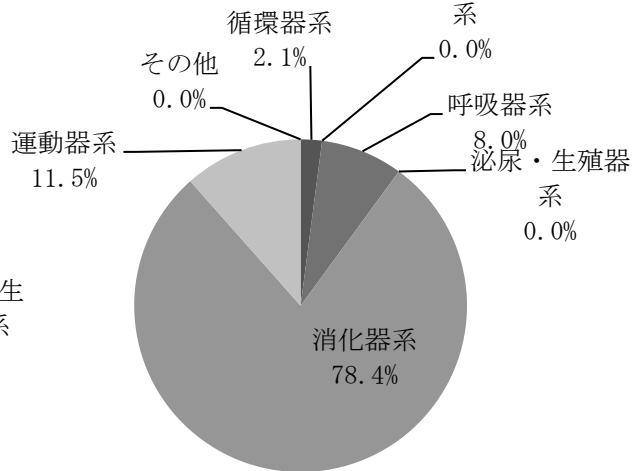
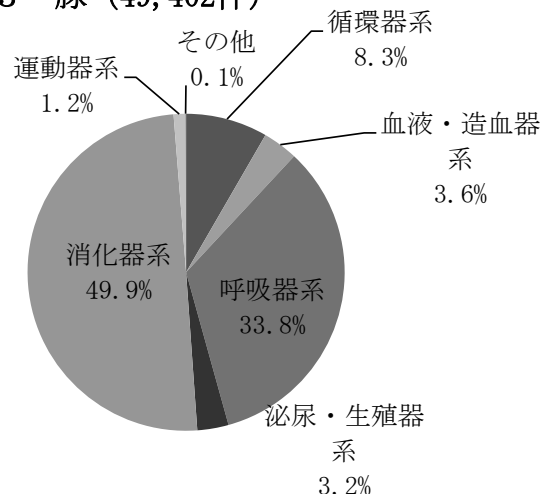


図3 豚 (49,402件)



(8) とくのと畜場別・器官別疾病数

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数	65	6	71
処分実頭数	5	6	11

疾病名				
循環器系	心外膜炎		1	1
	心内膜炎		1	1
	心筋炎			0
	小計	0	2	2
泌尿器系	腎炎		2	2
	膀胱炎			0
	小計	0	2	2
呼吸器系	肺炎	1	3	4
	肺膿瘍			0
	胸膜炎		1	1
	小計	1	4	5
消化器系	胃炎		2	2
	小腸炎	2	5	7
	大腸炎	2	3	5
	肝炎(その他)		4	4
	肝出血			0
	鋸屑肝			0
	肝膿瘍			0
	腹膜炎	2		2
	腸間膜脂肪壊死			0
	ヘルニア			0
	小計	6	14	20
運動器系	筋膿瘍			0
	筋炎			0
	筋水腫		3	3
	骨折			0
	関節炎			0
	小計	0	3	3
その他	皮下膿瘍			0
	小計	0	3	3
合計		7	25	35

(9) めん羊のと畜場別・器官別疾病数

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数	7	0	7
処分実頭数	4	0	4

疾病名				
	肺炎	1		1
	肝炎	2		2
	鋸屑肝	2		2
	ヘルニア	1		1
				0
合計		6	0	6

(10) 山羊のと畜場別・器官別疾病数

と畜場名	県南	九食	合計
と畜検査頭数	7	0	7
処分実頭数		0	0

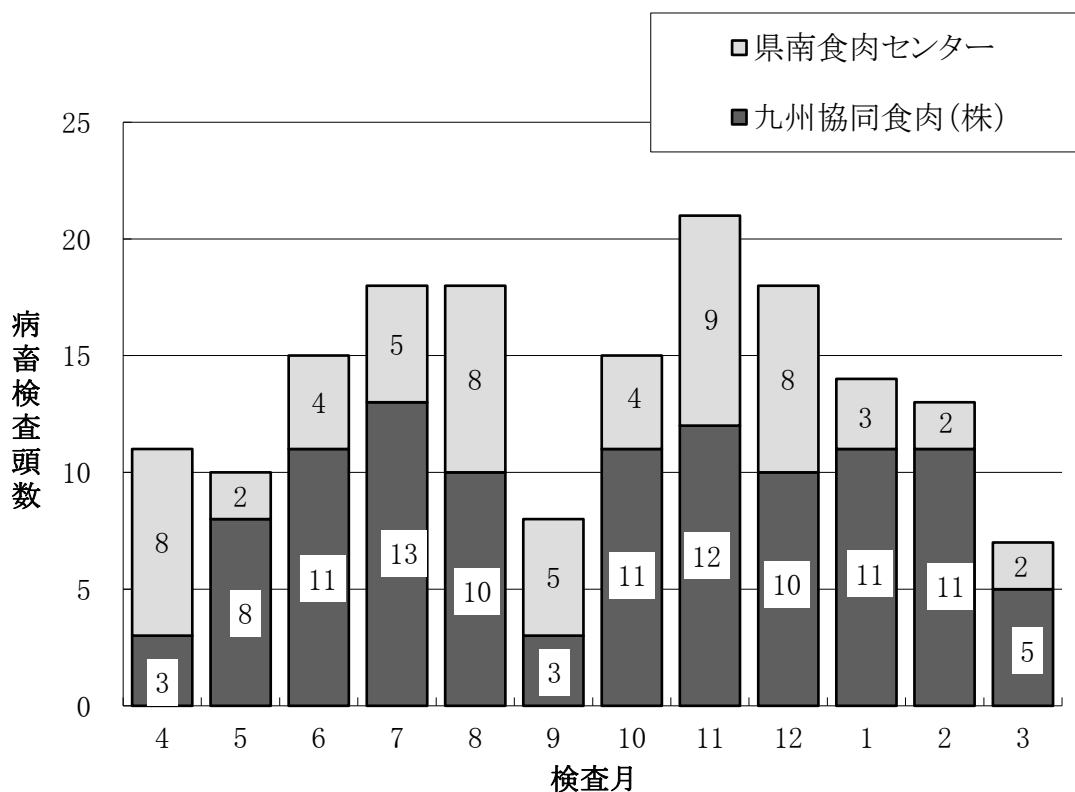
疾病名			
心外膜炎			0
肺炎			0
脱臼			0
			0
合計	0	0	0

(11) 病畜検査状況

ア と畜場別・畜種別・月別病畜検査頭数

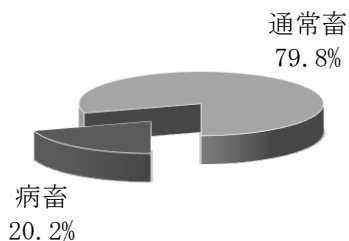
と畜場名	畜種	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
県南食肉センター	牛	8	2	4	5	8	5	4	9	8	3	2	2	60
	とく	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	馬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
九州協同食肉(株)	牛	2	8	11	13	10	2	11	12	9	10	11	5	104
	とく	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	4
月計	牛	10	10	15	18	18	7	15	21	17	13	13	7	164
	とく	1	0	0	0	0	1	0	0	1	1	0	0	4
	馬	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

イ と畜場別病畜検査頭数

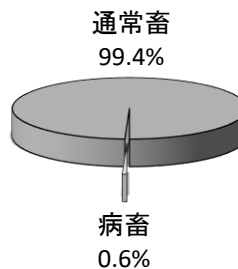


ウ 各と畜場における検査総数に占める病畜検査頭数割合

県南食肉センター (牛)



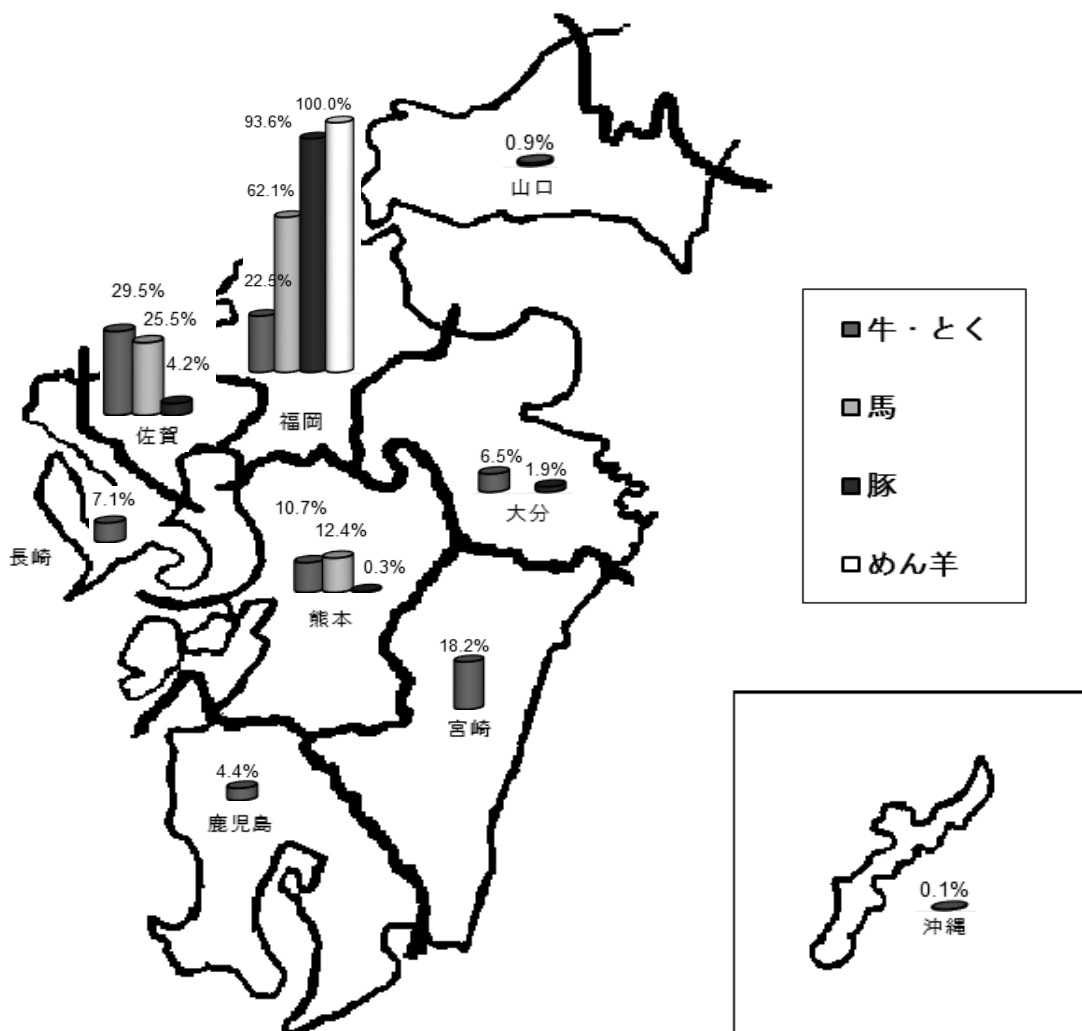
九州協同食肉(株) (牛)



(12) と畜種別・出荷地別搬入状況

	牛	とく	馬	豚	めん羊・山羊
福岡	3,670	5	692	58,334	1
佐賀	5,330		316	3,068	
長崎	1,256				
熊本	2,181	65	73		2
大分	948	1		1,122	
宮崎	2,754				5
鹿児島	1,223				
沖縄	17				
高知					
山口	129				
北海道					
合計	17,508	71	1,081	62,524	8

県別出荷割合



(12) B S E 検査

平成13年9月21日に国内初のBSE（牛海綿状脳症）が確認されたことに伴い、平成13年10月18日以降、と畜を行う全ての牛についてBSE検査を実施してきた。平成29年4月1日から健康と畜牛のBSE検査が廃止されたことを受け、検査が必要とみなされた牛の検査を実施している。

なお、令和2年3月31日現在までのスクリーニング検査の結果、平成16年12月15日に1頭陽性反応を呈したが、国立感染症研究所の確認検査の結果陰性であった。

BSE検査実施牛(とくを含む)の内訳 (頭数)

【県南食肉センター】

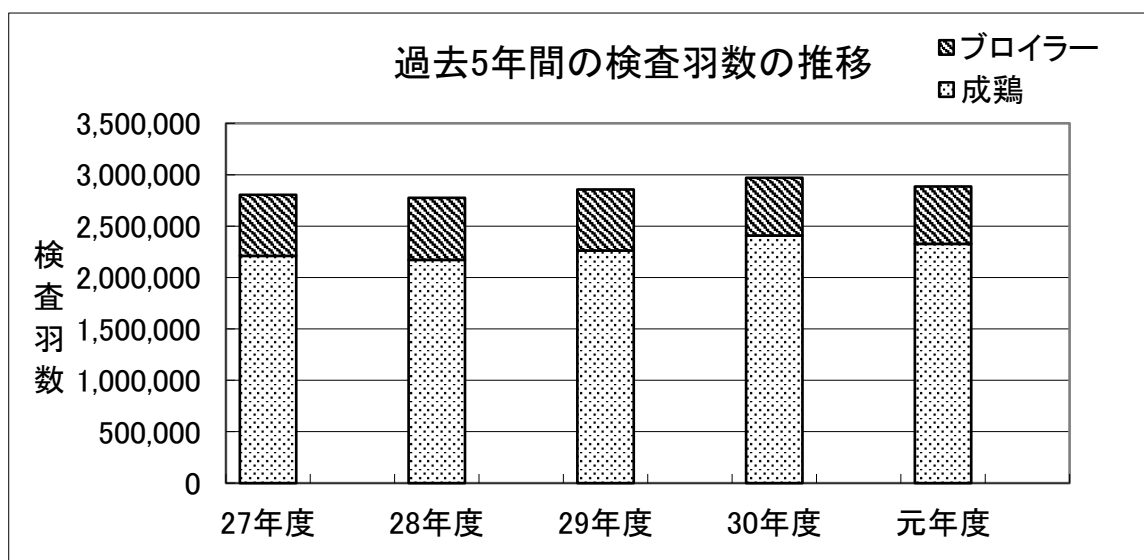
分 類	乳用種		肉専用種		交雑種		計	
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外
ア 生後24ヶ月齢以上の牛のうち、 生体検査時において運動障害、 知覚障害、反射又は意識障害等 の神経症状が疑われたもの及び 全身症状を呈する牛	0	0	0	0	0	0	0	0
イ その他の牛	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0

【九州協同食肉株】

分 類	乳用種		肉専用種		交雑種		計	
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外
ア 生後24ヶ月齢以上の牛のうち、 生体検査時において運動障害、 知覚障害、反射又は意識障害等 の神経症状が疑われたもの及び 全身症状を呈する牛	0	0	0	0	0	0	0	0
イ その他の牛	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0

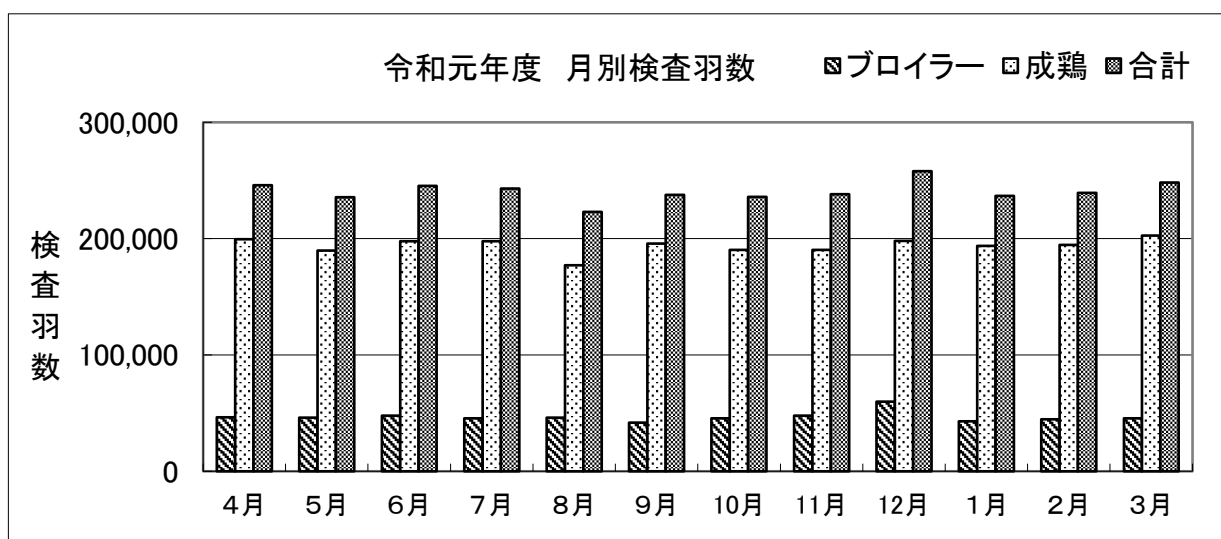
2 食鳥検査

(1) 大規模食鳥処理場の食鳥検査羽数及び検査結果



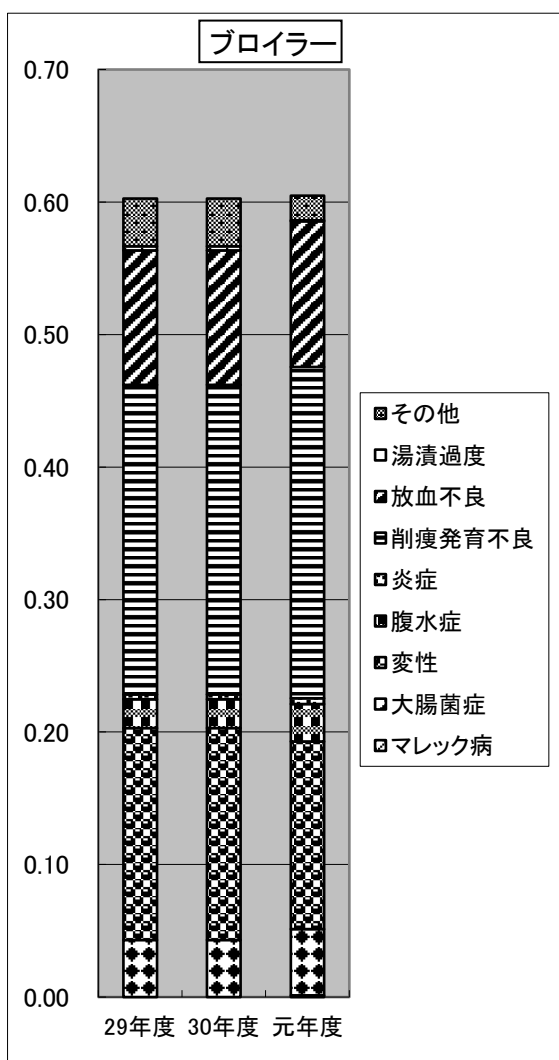
	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度
ブロイラー	594,318	602,270	593,600	562,599	559,564
成鶏	2,209,333	2,171,778	2,263,839	2,408,058	2,327,268
合計	2,803,651	2,774,048	2,857,439	2,970,657	2,886,832

処理施設数: 2施設

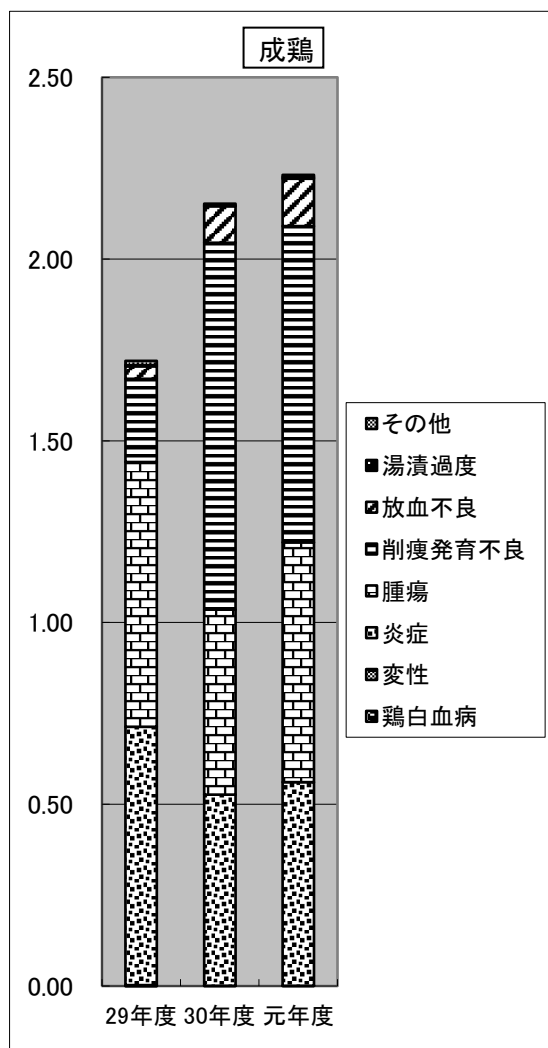


鶏種/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
ブロイラー	46,377	45,977	47,690	45,527	46,052	41,743	45,506	47,788	59,792	42,949	44,638	45,525	559,564
成鶏	199,469	189,709	197,653	197,665	176,986	195,807	190,435	190,274	198,147	193,814	194,720	202,589	2,327,268
合計	245,846	235,686	245,343	243,192	223,038	237,550	235,941	238,062	257,939	236,763	239,358	248,114	2,886,832

過去3年間の廃棄の原因(禁止・全部廃棄)



禁止全廃率(%)



禁止全廃率(%)

	29年度	30年度	元年度
マレック病	0.00	0.00	0.00
大腸菌症	0.04	0.04	0.05
変性	0.16	0.16	0.14
腹水症	0.02	0.02	0.03
炎症	0.00	0.00	0.00
削瘦発育不良	0.23	0.23	0.25
放血不良	0.10	0.10	0.11
湯漬過度	0.00	0.00	0.00
その他	0.04	0.04	0.02
禁止全廃率	0.54	0.60	0.66

	29年度	30年度	元年度
鶏白血病	0.00	0.00	0.00
変性	0.00	0.00	0.00
炎症	0.71	0.53	0.56
腫瘍	0.73	0.51	0.66
削瘦発育不良	0.23	1.01	0.87
放血不良	0.03	0.10	0.13
湯漬過度	0.00	0.00	0.00
その他	0.01	0.00	0.01
禁止全廃率	1.72	2.15	2.02

と殺、内臓の摘出禁止又は廃棄したもの原因

処理食鳥種		ブロイラー			成 鶏			計		
検査羽数		559,564			2,327,268			2,886,832		
処分項目		禁止	全部廃棄	一部廃棄	禁止	全部廃棄	一部廃棄	禁止	全部廃棄	一部廃棄
処理実羽数		2,465	662	3,987	23,097	28,818	7,072	25,562	29,480	11,059
ク ウ イ ル ミ ジ ス ア 病	鶏 痘									
	伝染性気管支炎									
	伝染性咽頭気管支炎									
	ニューカッスル病									
	鶏 白 血 病					13				
	封 入 体 肝 炎									
	マ レ ッ ク 病	1	6					1	6	
	そ の 他									
細 菌 病	大 腸 菌 症		265			62			327	
	伝染性コリーザ									
	サルモネラ病									
	ブドウ球菌					1				
	そ の 他									
そ の 他 の 疾 病	毒 血 症									
	膿 毒 症		2							
	敗 血 症	3	70							
	真 菌 症									
	原虫病(トキソを除く)									
	寄 生 虫 病									
	変 性	726	66	371		11	5	922	41	337
	尿酸塩沈着症									
	水 腫					7				
	腹 水 症	122	37					92	37	
	出 血	5	3	1,519		67	7,000	52	30	7,762
	炎 症	1	23	1,730		13,107	64	3	11,905	196
	萎 縮									
	腫 瘍		3	8		15,251			11,538	5
	臓器の異常な形等	8	1	357		12	3	1	55	77
	異 常 体 温									
	黄 疸	1	2							
	外 傷	5	1	2		1				
	中 毒 諸 症									
	削瘦及び発育不良	1,411	177		19,960	278		23,542	686	
放 血 不 良	178	6		3,039	2		2,872	12		
湯 漬 過 度	4			98	6		61	1		
そ の 他										
計	2,465	662	3,987	23,097	28,818	7,072	25,562	29,480	11,059	

(2) 認定小規模食鳥処理場の確認羽数及び確認結果

種類 (開場日数)	確認羽数	食鳥の異常の有無確認結果						廃棄羽数の 合計	
		生体の 状況	体表の状況		体壁の 内側面 の状況	内臓の状況		全部 廃棄	一部 廃棄
		禁止 又は 全部 廃棄	全部 廃棄	一部 廃棄	全部 廃棄	当該 臓器 のみ 廃棄	内臓 全て 廃棄		
ブロイラー (935)	13,530	5	7	35	1	112	0	13	147
成鶏 (1,938)	288,898	340	542	1,595	571	6,147	208	1,453	7,950
あひる 0	0								
七面鳥 0	0								
合計	302,428	345	549	1,630	572	6,259	208	1,466	8,097

施設数:15施設
(うち2施設は休止中)

認定小規模食鳥処理場に対しては、定期的に食鳥検査員2名で各施設への立ち入り調査を実施し、確認規程に基づく確認作業の実施状況、構造設備及び衛生管理基準の遵守状況について、巡回時に確認の上、指導している。

3 精密検査

(1) 微生物検査

食肉等の検査に対応する精密検査【表1】

令和元年度、食肉検査の判定に関わる微生物学的検査を牛（とくを含む）7頭、豚239頭で実施した。

陽性と判定したもののうち疾病別では敗血症が44頭、豚丹毒が67頭であった。

表1 病因決定のための検査

検査項目	畜種	延べ検査頭数	延べ検体数	延べ陽性頭数	備考
敗血症	豚	68	340	42	
	牛	7	35	2	
豚丹毒	豚	170	367	67	関節炎型 : 57頭 心内膜炎型 : 8頭 敗血症型 : 1頭 皮膚型 : 1頭
その他	豚	1	1	0	豚赤痢疑い : 1頭
計		246	743	111	

※ 敗血症を疑って精密検査を行ったもののうち、豚8頭を心内膜炎型豚丹毒、豚1頭を敗血症型豚丹毒と診断した。

(2) 理化学検査

令和元年度に理化学検査を実施した獣畜は363頭、検体数は627検体であった。

【表2】

表2 理化学検査件数

検査項目		検査頭数	検体数	検査細目
尿毒症		11	25	アズスティック 血清中尿素窒素 血清中クレアチニン
黄疸		17	17	血清中総ビリルビン
残留有害物質	簡易法	274	524	抗生物質（ペニシリン系、テトラサイクリン系、アミノグリコシド系、マクロライド系）
	分別推定法	4	4	抗生物質（ペニシリン系、テトラサイクリン系、アミノグリコシド系、マクロライド系）
	HPLC等	57	57	合成抗菌剤（11成分*1） 抗生物質（テトラサイクリン系）
合計		363	627	

* 1：オキシリン酸、チアンフェニコール、ジフラゾン、オルトメトプリム、トリメトプリム、ピリメタミン及びサルファ剤（スルファメラジン、スルファジミジン、スルファモノメトキシ、スルファジメトキシ、スルファキノキサリン）

ア と畜検査に対応する精密検査

(ア) 尿毒症

「尿毒症」が疑われた牛11頭について、簡易検査及び精密検査を実施し、血清中の尿素窒素（BUN）濃度及びクレアチニン濃度を測定した結果、牛5頭を尿毒症と診断し、全部廃棄処分とした。【表3】

表3 尿毒症による全部廃棄

月日	獣種	場所	尿素窒素（BUN） 濃度（mg/dl）	所見
			クレアチニン 濃度（mg/dl）	
7月2日	牛 （肉）	九食	137	肝出血、膀胱炎、膀胱結石、腎炎、腎 周囲脂肪壊死、筋水腫
			11.4	
8月5日	牛 （肉）	九食	200 over	心臓水腫、肝炎、肺炎、筋水腫、胃 炎、小腸炎、腎炎
			20.2	
8月15日	牛 （乳）	九食	72	肝炎、肺炎、筋水腫、腹膜炎、大腸 炎、小腸炎、腎炎、膀胱炎、膀胱破裂
			6.4	
8月28日	牛 （肉）	九食	100	肝包膜炎、肺炎、筋炎、筋水腫、腹膜 炎、大腸炎、小腸炎、腎年、腎周囲脂 肪水腫、膀胱炎
			35.1	
9月19日	牛 （肉）	九食	127	心外膜炎、肝炎、筋炎、腎炎、腎膿 瘍、膀胱炎
			15.7	

(イ) 黄疸

「高度の黄疸」が疑われた牛17頭について、血清中の総ビリルビン（T-Bil）濃度を測定した結果、牛2頭を全部廃棄とした。【表4】

表4 高度の黄疸による全部廃棄畜

月日	獣種	場所	血清中総ビリルビン (mg/dl)	所見
4月10日	牛 (肉)	九食	5.2	全身の黄変、肝炎、小腸炎
11月7日	牛 (肉)	九食	4.2	全身の黄変、肝炎、心外膜炎、肝包膜炎、肺炎、脾臓破裂、腹膜炎、腎炎、筋水腫

イ 食肉中の残留有害物質検査

福岡県食品衛生監視指導計画に基づき、通常搬入畜及び家きんを対象とした残留有害物質モニタリング検査を実施した。検査頭数は119頭、結果は全て陰性であった。

また、抗菌性物質の残留が疑われる病畜及び通常搬入畜の一部についても、簡易法（直接法）によるモニタリング検査を実施した。検査頭数は155頭、簡易法を実施し、結果は全て陰性であった。【表5、6】

表5 モニタリング検査（簡易法）結果

獣種	通常畜(モニタリング)		病畜等		計	
	検査頭数	陽性数	検査頭数	陽性数	検査頭数	陽性数
牛	50	0	155	0	205	0
とく	0	0	0	0	0	0
馬	13	0	0	0	13	0
豚	32	0	0	0	32	0
鶏	24	0	0	0	24	0
計	119	0	155	0	274	0

表6 抗菌性物質検査項目別検査頭数

物質名	検査項目			合計 (延べ頭数)
	簡易法	分推定別法	合抗菌成剤	
牛	205	4	24	233
とく	0	0	0	0
馬	13	0	6	19
豚	32	0	15	47
鶏	24	0	12	36
合計	274	4	57	335

(3) 病理検査

ア 病理検査件数

令和元年度に病理組織検査を実施した獣畜は111頭羽、検体数は400検体であった。

イ 診断した疾病

獣種別の診断した疾病は以下のとおり。なお、括弧内の数は症例数を示す。

<牛：73頭>

- | | | |
|----------|------|---|
| ・炎症（36） | 心臓 | 疣贅性心内膜炎（2）、非化膿性心外膜炎（1）、好酸球性心外膜炎（1）、 |
| | 呼吸器 | 間質性肺炎（1）、 |
| | 肝臓 | 寄生虫性好酸球性胆管肝炎（1）、非化膿性間質性肝炎（1）、リンパ球性肝炎（1）、化膿性肝炎（1）、化膿性肉芽腫性肝炎（1）、増殖性好酸球性小葉間静脈炎（1）、 |
| | 腎臓 | 非化膿性間質性腎炎（3）、好酸球性間質性腎炎（1）、間質性腎炎（5）、好酸球性尿細管間質性腎炎（1）尿細管間質性腎炎（1）、腎盂腎炎（1）、 |
| | 消化管 | 好酸球性小腸炎（2）、結節性好酸球性小腸漿膜炎（2） |
| | リンパ節 | 化膿性肉芽腫性リンパ節炎（3）、化膿性リンパ節炎（1）反応性リンパ節炎（1）、石灰沈着を伴うリンパ節炎（2）、 |
| | その他 | 線維化（1）、寄生虫性過形成性慢性膵臓導管炎（1） |
| ・腫瘍（22） | | リンパ腫（20）、副腎皮質腺腫（2） |
| ・変性（4） | 肝臓 | 微小出血（4） |
| ・奇形（1） | 腎臓 | リポフスチン沈着（1） |
| ・循環障害（5） | 肝臓 | 微小出血及び巣状壊死（4）、その他（1） |
| ・その他（5） | | メラノーシス（1）、リンパ節の髓外造血（2）、その他（2） |

<豚：34頭>

- ・炎症（23）
 - 心臓 疣贅性心内膜炎（2）心外膜炎（1）
 - 肝臓 間質性肝炎（3）、非化膿性肝炎（1）、肉芽腫性肝炎（1）、好酸球性肝炎（1）、好酸球性間質性肝炎（2）、化膿性肉芽腫性間質性肝炎（1）、化膿性出血性肝炎（1）、多巣状性線維化（1）、慢性化膿性胆管肝炎（1）
 - 腎臓 好酸球性間質性腎炎（2）、慢性腎盂腎炎（1）、
 - 消化管 化膿性壊死性小腸炎（1）、大腸粘膜表層壊死（1）
 - リンパ節 肉芽腫性リンパ節炎（1）、肉芽腫性リンパ節炎（2）
- ・腫瘍（5）
 - リンパ腫（3）、顆粒膜細胞腫（1）、その他（1）
- ・変性（1）
 - 腎臓 急性尿細管壊死（1）
- ・奇形（1）
 - 肝臓 漿液性嚢胞（1）
- ・その他（4）
 - 肝線維化（1）、その他（3）

<鶏：4羽>

- ・炎症（2）
 - 慢性化膿性肉芽腫性肝炎（1）、化膿性間質性肝炎（1）
- ・腫瘍（2）
 - 腺癌（2）

(4) 業務管理基準（G L P）の対応、整備について

食品衛生検査施設におけるG L P導入については、食品衛生法施行令の一部改正により、平成9年4月1日から義務づけられ、当所でも平成10年4月からスタートした。

ア 導入経過

本県でも、平成9年度中に県内の食品衛生検査施設（当検査所、保健所検査課6施設（現在3施設）及び保健環境研究所）より検討委員を選出して、①試験品取扱標準作業書、②試薬管理標準作業書について、県下の検査施設での統一した作業書とラベルを作成した。併せて、試験品採取記録簿、試験品管理記録簿及び検査管理簿兼結果表の3部複写様式の作成と、検査結果通知書の原則統一様式の作成を行った。

その他の③機械器具保守管理標準作業書④検査実施標準作業書については、当所独自に作成した。

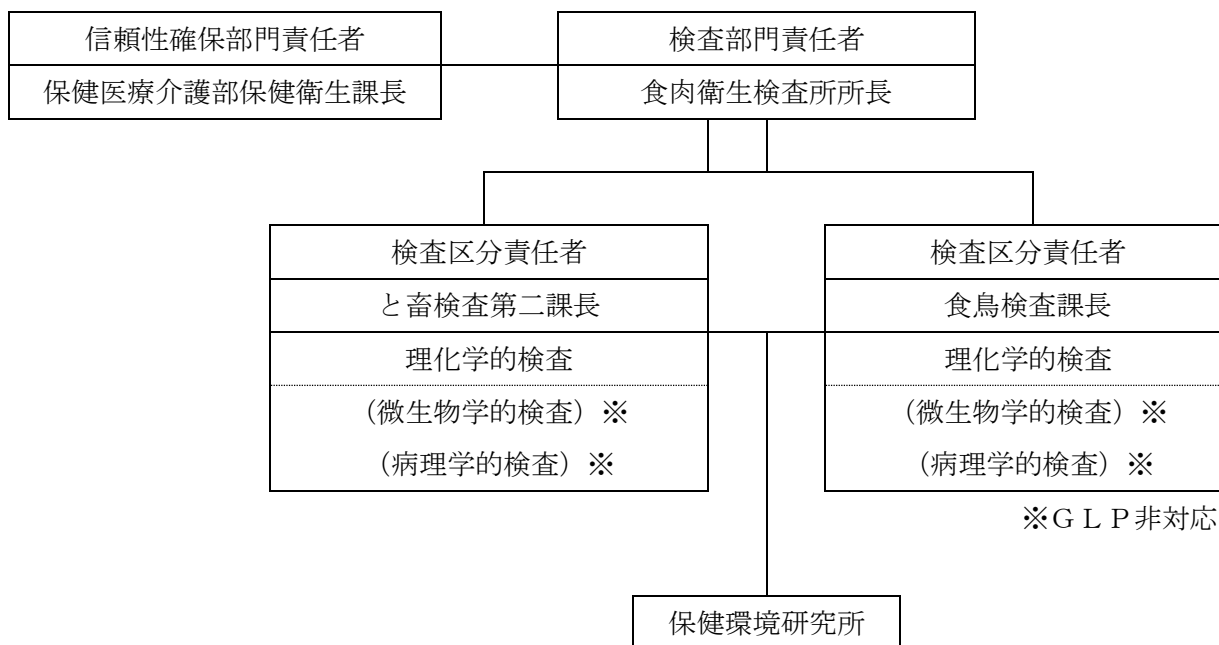
平成11年4月、「福岡県食品衛生検査施設等の業務管理に関する連絡協議会設置要領」が策定され、G L P委員連絡協議会、G L P検査区分責任者連絡協議会、G L P実務者連絡協議会が設置された。

令和元年度は、G L P検査区分責任者連絡協議会が1回、実務者連絡協議会が1回開催された。

イ 業務管理体制（組織の構成）

当所の業務管理体制は、下記の図のとおりである。当所の特色としては、と畜検査課と食鳥検査課で勤務時間が異なる変則勤務のため、と畜検査課と食鳥検査課にそれぞれ検査区分責任者を置いている。

また、当所において定量試験を行うことが困難な検査項目については、保健環境研究所に検査依頼を行っている。



ウ 対象検査項目及び獣畜鶏

当所でのGLPの対象検査項目としては、食品衛生法の規格基準が設定されているもの（抗生物質、合成抗菌剤及び寄生虫駆除剤）で、病畜、通常畜及び畜水産食品のモニタリング調査（厚生労働省）の対象獣畜及び鶏について実施した。

エ 内部精度管理

令和元年度は「スルファキノキサリン、スルファジアジン、スルファジミジン、スルファジメトキシシ、スルファメトキサゾール、スルファメトキシピリダジン、スルファメラジン、スルファモノメトキシシ試験法」、「オキシテトラサイクリン、テトラサイクリン及びクロルテトラサイクリン試験法」についてそれぞれ実施した。

オ 外部精度管理

（一財）食品薬品安全センター主催の全国統一の外部精度管理に、平成10年度から毎年参加している。

令和元年度の参加項目および対象物質は、①細菌数測定；一般細菌数、②細菌同定；サルモネラ属菌、③残留動物用医薬品；スルファジミジンであり、①、②、③ともに良好な結果であった。

カ 妥当性評価

「食品中に残留する農薬等に関する試験法の妥当性評価ガイドラインの一部改正について」（平成22年12月24日食安発第1224第1号）により、各試験機関において平成25年12月13日までに農薬等に関する試験法の妥当性評価を行うこととなった。

例年、各検査法のうち1検査法について、妥当性評価を行うこととしている。

キ 内部点検

令和元年度は信頼性確保部門責任者による内部点検が1回行われた。

4 衛生指導

(1) 微生物検査

〈と畜関係〉

当所では、「令和元年度と畜場における枝肉の微生物汚染実態調査等について」（令和元年7月19日付薬生食監発0719第1号厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生・食品安全部監視安全課長通知）に基づく検査の他、衛生検査を行っている。検査対象及び検査項目は下表のとおり。

なお、陽性が検出されたと畜場については、結果に基づき衛生指導を実施済みである。

ア と畜場における枝肉の微生物汚染実態調査

検査項目	検体数
一般細菌数及び大腸菌群数（牛枝肉ふき取り）	104
一般細菌数及び大腸菌群数（豚枝肉ふき取り）	80
G F A P 残留量調査*（牛枝肉ふき取り）	106

イ 衛生検査

検査項目	検査数
腸管出血性大腸菌検査（牛枝肉）	16（0）
糞便系大腸菌群及びサルモネラ属菌（馬枝肉・肝臓ふき取り）	36（0）
ザルコシスティス検査（馬頸部筋肉・PCR検査）	14（0）

（ ）は陽性検体数

* グリア繊維性酸性タンパク質。
特定部位である脳・せき髄組織の残留量を確認するための検査。

〈食鳥関係〉

当所では、食鳥及び食肉処理における衛生水準の向上によって食鳥肉の微生物汚染の防止を図ることを目的に、各食鳥処理場の衛生指導の指標とするための衛生検査を年1回実施している。

ア 検査期間

認定小規模食鳥処理施設 令和元年10月

大規模食鳥処理施設 令和元年 6月

イ 検査項目

一般生菌数、大腸菌群数、カンピロバクター属菌(定性)

ウ 検査方法

一般生菌数及び大腸菌群数の定量にはペトリフィルムを使用

カンピロバクターの定性にはプチットカンピロ及びシングルパスカンピロバクター使用。

参考指標:「食鳥処理場における微生物学的目標基準及び検査結果に基づく措置」

一般生菌数:冷却前とたい及び器具等については10,000/cm²以下

冷却後とたい及び製品については1,000/cm²以下

エ 指導等

大規模食鳥処理場に対しては、「平成30年度食鳥処理衛生向上運動旬間」での衛生等に関する講習会において結果説明、必要に応じ衛生指導を行った。認定小規模事業者に対しては、「令和元年度食鳥処理衛生向上運動旬間」での衛生等に関する講習会において結果説明、必要に応じ衛生指導を実施予定。

エ 検査結果

① 大規模食鳥処理場(2施設)

検査箇所(数)	一般生菌数 (>10,000/cm ²)	大腸菌群数 (/cm ²)	カンピロバクター 属菌(陽性数)
食鳥処理工程の食鳥肉(7)	6/7 (86%)	ND~3500	6
食鳥処理工程の機械器具等(2)	3/4 (75%)	ND~130,000	2

検査箇所(数)	一般生菌数 (>1,000/cm ²)	大腸菌群数 (/cm ²)	カンピロバクター 属菌(陽性数)
食肉処理工程の食鳥肉(8)	4/7 (57%)	ND~8,100	5
食肉処理工程の機械器具等(4)	4/8 (50%)	ND~54,000	2

② 認定小規模食鳥処理場(13施設)

検査箇所(数)	一般生菌数 (>1,000/cm ²)	大腸菌群数 (/cm ²)	カンピロバクター 属菌(陽性数)
とたい (23)	5/23 (22%)	ND~193	8
器具(まな板)	1/3 (33%)	ND~3300	0

(2) 衛生旬間

と畜場及び食鳥処理場の清潔保持並びに、食肉等の衛生的な取扱いの強化及び関係者の衛生思想の普及向上により、清潔で衛生的な食肉等の生産を図る目的で、毎年6月から7月に衛生旬間を定め衛生標準作業手順書等に基づく衛生指導及び講習会を開催している。九州協同食肉(株)では、と畜業者自らが実施した講習会の補助を行った。

〈と畜関係〉

と畜場名	講習会開催月日	受講者数	衛生指導内容
県南食肉センター	6月25日	7名	①衛生標準作業手順書に基づく作業点検表を用いた作業手順の遵守確認 ②上記手順書に基づく記録等の点検 ③衛生講習会の実施または補助
九州協同食肉(株)	6月26日	29名	

〈食鳥関係〉

大規模食鳥処理場名	開催月日	受講者数	講習内容
(株)ヤマショウフーズ	7月4日	63名	① R1年度の細菌検査の結果 ② 一般衛生管理及びHACCPによる自主衛生管理について
(株)あらい	7月5日	25名	

認定小規模食鳥処理場については、県下2ヶ所で講習会を開催した。

講習場所	開催月日	受講者数	講習内容
福岡県食肉衛生検査所	7月3日	10名	① H30年度の細菌検査の結果 ② 一般衛生管理及びHACCPによる自主衛生管理について
宗像・遠賀保健福祉環境事務所	7月9日	2名	

(3) と畜場、大規模食鳥処理場に併設する食肉処理施設等の監視指導

本所は、福岡県食品衛生監視指導計画に基づき、と畜検査及び食鳥検査業務に併せてこれらの施設の監視指導を行っている。

業種・種類	施設数	計画監視件数	監視件数	監視率(%)
①と畜場併設の食肉処理業のうち生食用の馬肉及び肝臓取扱い施設 ②大規模食鳥処理場に併設する食肉処理業	3	750	749	99.9
①と畜場併設の食肉処理業のうち生食用食肉取扱い施設 ②認定小規模食鳥処理場併設の食肉処理業 ③対外国食肉輸出施設として認定された食肉処理業	15	180	169	93.9
野生獣肉を取り扱う食肉処理業	9	54	24	44.4
と畜場併設の食肉処理業(上記以外)	2	4	14	350.0

第 3 章 調査研究

に浸潤するリンパ球が CD3 陽性に染まった。リンパ節では、CD20 はリンパ球のリンパ球が陽性、CD3 は主に傍ろ胞領域、胚中心でも少数のリンパ球が陽性に染まった。

考 察

腫瘍の組織像および腫瘍細胞が B 細胞マーカーに陽性を示すことから、本症例を動物の腫瘍の WHO 分類におけるろ胞中心細胞性リンパ腫Ⅲと診断した。ろ胞性リンパ腫は遅進行性、リンパ節の胚中心から生じ、ろ胞構造とマントル層の消失を特徴とする。ろ胞性リンパ腫は、ヒトではリンパ腫の 25%程度、動物では 5%程度である。その中の細分類であるろ胞中心細胞性リンパ腫Ⅲは、主に大型リンパ球様細胞からなるろ胞構造をもち、核分裂像は全てのろ胞で多い（400 倍視野内に 16 個以上）〔7〕。本症例は、これらのろ胞中心細胞性リンパ腫Ⅲの形態的特徴によく当てはまっていた。

通常、腎臓にリンパ組織はないため、腎臓にろ胞性リンパ腫が生じることは珍しいと思われる。経験上、豚の腎臓を組織学的に検索すると、リンパ球浸潤を主体とする間質性腎炎がしばしば認められ、ときにリンパろ胞形成も認められる。本症例の腎臓間質にもリンパろ胞の形成が認められたことから、その一部から腫瘍が生じたと考えられる。このようにリンパ腫は炎症に続発する可能性があることから、リンパ腫はどんな臓器からも生じると考えられる。

と畜検査の際、本症例は肉眼的にリンパ腫とは疑われておらず、腎炎と考えられていた。豚では腎炎はあまり珍しくなく、平成 28 年から 30 年までの 3 年間における福岡県のと畜検査では 0.8%の豚の腎臓が腎炎により一部廃棄された〔8-10〕。経験上、本症例と同様の肉眼所見の豚の腎臓白色結節病変は稀にみられ、組織学的に検索すると、非化膿性、肉芽腫性または好酸球性の炎症がみられた。本症例は、偶発的に組織学的検索が行われたためにリンパ腫と判明したが、初期のろ胞性リンパ腫は臓器の炎症やリンパ節の軽度腫大として一部廃棄されている可能性が考えられる。そのため、ろ胞性増殖のみからなる豚のリンパ腫はあまり発見されないと考えられる。

局所にとどまるろ胞性リンパ腫は、臓器等の一部に局限された腫瘍にあたるため、当該病変および血液の部分廃棄となる〔11〕。管内と畜場では血液の食用利用はない。したがって、ろ胞性リンパ腫は実際のところは腫瘍であるが、と畜検査において炎症として一部廃棄されても、あまり問題にはならないと考えられる。しかし、組織学的に精査を行う際は、正確な診断を行うため、どんな臓器においても、リンパろ胞様構造が観察された際にはろ胞性リンパ腫の鑑別は必要と考えられる。

まとめ

豚では、部分的にろ胞性増殖を示すリンパ腫の報告は少なくないが、ろ胞性増殖のみからなるリンパ腫の報告はほとんどない。今回、と畜検査において豚の腎臓に白色結節を認め、組織学的に動物の腫瘍の WHO 分類におけるろ胞中心細胞性リンパ腫Ⅲと診断した。本

症例の腎臓間質に小型のリンパろ胞形成が認められたことから、その一部から腫瘍が生じたと考えられる。局所にとどまるろ胞性リンパ腫は臓器の炎症やリンパ節の軽度腫大として一部廃棄されるために、ろ胞性増殖のみからなる豚のリンパ腫はあまり発見されないと考えられる。組織学的に精査を行う際は、どんな臓器においても、リンパろ胞様構造が観察された際にはろ胞性リンパ腫の鑑別は必要と考えられる。

謝 辞

本研究にあたり、免疫組織化学染色を実施くださり、診断についてのご助言をくださった東京大学獣医病理学研究室、内田和幸先生に深謝いたします。

- (1) Nakajima H, Mabara S, Ishino S, Kadota K: Zentralbl Veterinarmed A. 36, 621-630 (1989)
- (2) 中島弘美、橋本夏美、石野清之、門田耕一：日獣会誌、43、369-374 (1990)
- (3) 中島弘美、笠井潔、門田耕一、石野清之：日獣会誌、53、324-327 (2000)
- (4) Seno M, Umisa H: Jpn J Vet Sci. 42, 259-263 (1980)
- (5) Ogihara K, Ohba T, Takai H, Ishikawa Y, Kadota K: J Vet Med Sci. 74, 149-154 (2012)
- (6) Kadota K, Niibori S: J Comp Pathol. 95, 599-608 (1985)
- (7) Valli VE, Jacob RM, Parodi AL, Vermau W: Histological classification of hematopoietic tumors of domestic animals, WHO International Histological Classification of Tumors of Domestic Animals, 2nd Series vol VIII, Armed Forces Institution of Pathology, 30-31 (2002)
- (8) 福岡県食肉衛生検査所：平成 28 年度事業概要 (2017)
- (9) 福岡県食肉衛生検査所：平成 29 年度事業概要 (2018)
- (10) 福岡県食肉衛生検査所：平成 30 年度事業概要 (2019)
- (11) と畜場法施行規則、厚生省令第 44 号 (1953)、最終改正：厚生労働省令第 105 号 (2016)

年度	演 題 名	演 者 ・ 学 会 名
10	<ul style="list-style-type: none"> ・認定小規模食鳥処理場の指導について ・食鳥処理場における食中毒細菌汚染状況調査とその改善策 ・食鳥処理場における食鳥肉等のサルモネラ汚染状況 ・福岡県食肉衛生検査所における過去5年間の食鳥検査状況 ・福岡県における大規模食鳥処理場のカンピロバクターおよびサルモネラ汚染の実態調査 ・食鳥処理場におけるカンピロバクターの検出率とRAPD-PCR法による解析 ・と畜場で分離された大腸菌O157の解析 	<p>迎田 惠之 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>井手 修 ・全国食検協微生物部会 ・食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>前田 宏昭 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) ・日本獣医公衆衛生学会(全国)</p> <p>浜崎 伸一 ・福岡県公衆衛生学会</p> <p>安増 邦理 ・福岡県公衆衛生学会</p> <p>安増 邦理 ・全国食検協微生物部会</p> <p>高山 優子 ・福岡県公衆衛生学会 ・全国公衆衛生学会</p>
11	<ul style="list-style-type: none"> ・生き残りをかけたAと畜場への衛生指導 ・パルスフィールドゲル電気泳動法による食鳥処理場由来サルモネラの疫学解析 ・PCRによるCampylobacter jejuniの迅速検査法 ・カンピロバクターの馬尿酸塩加水分解試験についての一考察 	<p>竹内 峰男 ・九州地区食検協研修会 ・食肉衛生技術研修会</p> <p>前田 宏昭 ・日本獣医公衆衛生学会(九州)</p> <p>安増 邦理 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>永田 朋子 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会</p>
12	<ul style="list-style-type: none"> ・経過措置期間中の牛解体作業における衛生指導について ・食鳥処理場における衛生対策の検証 ・鶏におけるVRE保菌調査 ・豚におけるVRE保菌調査と枝肉の汚染調査 	<p>梅崎みどり ・九州地区食検協研修会</p> <p>井手 修 ・九州地区食検協研修会</p> <p>實政 智恵 ・食肉、食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>真鍋 修一 ・九州地区食検協研修会 ・食肉、食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>上田 敦士 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) ・福岡県公衆衛生学会 ・全国公衆衛生学会</p>
13	<ul style="list-style-type: none"> ・中抜き方法が異なる食鳥処理場における食鳥肉等の微生物汚染について ・と畜場における衛生意識向上のとりくみ ・牛におけるCampylobacter属菌の検出 ・牛胆汁におけるカンピロバクター属菌の保菌状況 	<p>井手 修 ・九州地区食検協研修会</p> <p>野見山 亨 ・食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>梅崎 由佳 ・福岡県公衆衛生学会</p> <p>安増 邦理 ・九州地区食検協研修会</p> <p>松木 三郎 ・福岡県公衆衛生学会</p>
14	<ul style="list-style-type: none"> ・認定小規模食鳥処理業者の衛生教育について ・ブロイラーにおけるカンピロバクター属菌の農場別保菌状況および薬剤感受性について ・認定小規模食鳥処理施設における衛生検査と改善指導について ・イヌ、ネコ、ウシ、ブタにおけるクリプトスポリジウムの検出結果 	<p>戸越 幸子 ・九州地区食検協研修会</p> <p>荒牧 明世 ・食鳥肉衛生技術研修会</p> <p>松木 三郎 ・九州地区食検協研修会</p> <p>長濱 邦昭 ・日本獣医公衆衛生学会(九州)</p> <p>藤田 幸辰 ・日本獣医公衆衛生学会(九州)</p>

年度	演 題 名	演 者 ・ 学 会 名
15	<ul style="list-style-type: none"> ・牛海綿状脳症(BSE)検査の取り組み ・福岡県における動物由来感染症予防体制整備事業について ・牛、豚およびブロイラーにおけるカンピロバクター属菌の保菌状況および食肉汚染について ・残留抗菌性物質独自モニタリング検査法の検討 	石田 剛 ・福岡県公衆衛生学会 荒牧 明世 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) ・福岡県獣医師会会報 松木 三郎 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) 松木 三郎 ・九州地区食検協研修会
16	<ul style="list-style-type: none"> ・残留抗菌性物質独自モニタリング検査法の検討 ・食肉処理施設と連携した衛生指導について ・認定小規模食鳥処理場の拭き取り検査結果に基づく衛生指導について 	荒牧 明世 ・全国食検協理化学部会 貝沼 陽子 ・九州地区食検協研修会 永田 祥代 ・九州地区食検協研修会
17	<ul style="list-style-type: none"> ・アイガモの食中毒細菌保有状況等に関する基礎調査について ・<i>B.megaterium</i>を用いた残留抗菌性物質スクリーニング検査法の検討 	野田 篤司 ・福岡県公衆衛生学会 ・全国公衆衛生獣医師協議会 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会 荒牧 明世 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) 南 奈津子 ・九州地区食検協研修会 ・食肉衛生技術研修会
18	<ul style="list-style-type: none"> ・ブロイラーの内臓におけるカンピロバクターの分布について ・福岡県の牛における <i>Coxiella burnetii</i> に対する抗体保有状況調査 	徳田 裕子 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会 大古場正史 ・九州地区食検協研修会
19	<ul style="list-style-type: none"> ・と畜場で斃死し炭疽を疑った牛から悪性水腫菌が分離された症例について ・と畜検査成績のフィードバックについて 	大古場正史 ・九州地区食検協研修会 野田 篤司 ・九州地区食検協研修会
20	<ul style="list-style-type: none"> ・認定小規模食鳥処理場での作業工程の改善事例について ・耳介腫大を呈した豚の2症例 ・と畜検査成績データベースシステム構築と疾病発生動向の共有について ・食肉処理場に出荷された福岡県産豚のE型肝炎ウイルス浸潤状況 	大池 史俊 ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会 葉玉 桐子 ・九州地区食検協研修会 谷崎 剛 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) 横山 敦史 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) 山崎 知絵 ・食品衛生監視員協議会(九州)
21	<ul style="list-style-type: none"> ・認定小規模食鳥処理場における自主衛生管理向上への取り組み ・枝肉微生物モニタリングの統計的評価からと畜場に対する指導まで ・衛生指標菌数モニタリングデータの統計的評価の一例 	浜崎 伸一 ・食品衛生監視員協議会(九州) ・九州地区食検協研修会 ・食鳥肉衛生技術研修会 谷崎 剛 ・日本獣医公衆衛生学会(九州) 清水 良平 ・九州地区食検協研修会
22	<ul style="list-style-type: none"> ・馬の内寄生虫用剤の使用状況及び筋肉中への残留状況調査 	谷崎 剛 ・日本獣医公衆衛生学会(九州)

年度	演 題 名	演 者 ・ 学 会 名
24	<ul style="list-style-type: none"> ・肉眼的に肺腫瘍との鑑別が困難であった馬の肺に形成されたCryptococcomaの一例 ・牛の第四胃粘膜下腫瘍、肝臓腫瘍 ・馬におけるCampylobacter属菌の保菌状況調査 	一二三達郎・九州地区食検協研修会 ・日本獣医公衆衛生学会（九州） 一二三達郎・全国食検協病理部会 鈿崎 健太・九州地区食検協研修会 ・食肉衛生技術研修会
25	<ul style="list-style-type: none"> ・肉眼的に結核病が疑われた牛の原発不明腺癌の一例 ・馬肝臓の灰白色硬結節におけるエキノコックス（多包虫）感染状況調査 ・馬肝臓の灰白色硬結節におけるエキノコックス（多包虫）感染状況調査 	木下広之・九州地区食検協研修会 一二三達郎・九州地区食検協研修会 池田加江・日本獣医公衆衛生学会（九州） ・日本獣医公衆衛生学会（全国）
26	<ul style="list-style-type: none"> ・胸壁への転移がみられた牛の胸膜原発線維肉腫の1例 ・福岡県のと畜場に搬入された馬にみられた肝臓灰白色硬結節と多包虫感染との関連性 ・生食用食肉の腸内細菌科菌群検出試験法を応用したふき取り検査等による生食用食肉加工施設への衛生指導について 	一二三達郎・日本獣医公衆衛生学会（九州） 一二三達郎・日本獣医師会雑誌第68巻第4号 植中 俊尚・九州地区食品衛生監視員研修会 ・全国食品衛生監視員研修会 （誌上発表）
27	<ul style="list-style-type: none"> ・と畜場内のふきとり検査等による豚レンサ球菌強毒株の浸潤状況調査について 	大谷 公美・九州地区食検協研修会
28	<ul style="list-style-type: none"> ・と畜検査において遭遇した牛のメラノーマ及び悪性黒色腫の症例 ・豚丹毒菌の性状解析と関係機関の連携による発生抑制への取組み 	吉田 桂子・九州地区食検協研修会 藤野 直子・全国食検協微生物部会
29	<ul style="list-style-type: none"> ・黒毛和種肥育牛でのヨーネ病発生事例 ・全身性の馬円虫症が疑われた1症例 	木下 広之・九州地区食検協研修会 木下 広之・日本獣医公衆衛生学会(九州) ・全国食検協研修会 （誌上発表）
30	リアルタイムPCRを使わないヨーネ病遺伝子検査法の検討 敗血症により全部廃棄処分とした豚の病理学的検査結果 採卵鶏の腹膜に多発した水泡病変1例についての鑑別 および診断	野見山結子・日本獣医公衆衛生学会（九州） 吉田 桂子・九州地区食検協研修会 吉田 桂子・全国食検協病理研修会 ・食肉及び食鳥肉衛生技術研修
1	と畜検査で遭遇した豚のろ胞性リンパ腫の症例	吉田 桂子・九州地区食検協研修会 ・The Journal of Medical Science 3月号

福岡県行政資料

分類記号 GF	所属コード 4404707
登録年度 02	登録番号 1